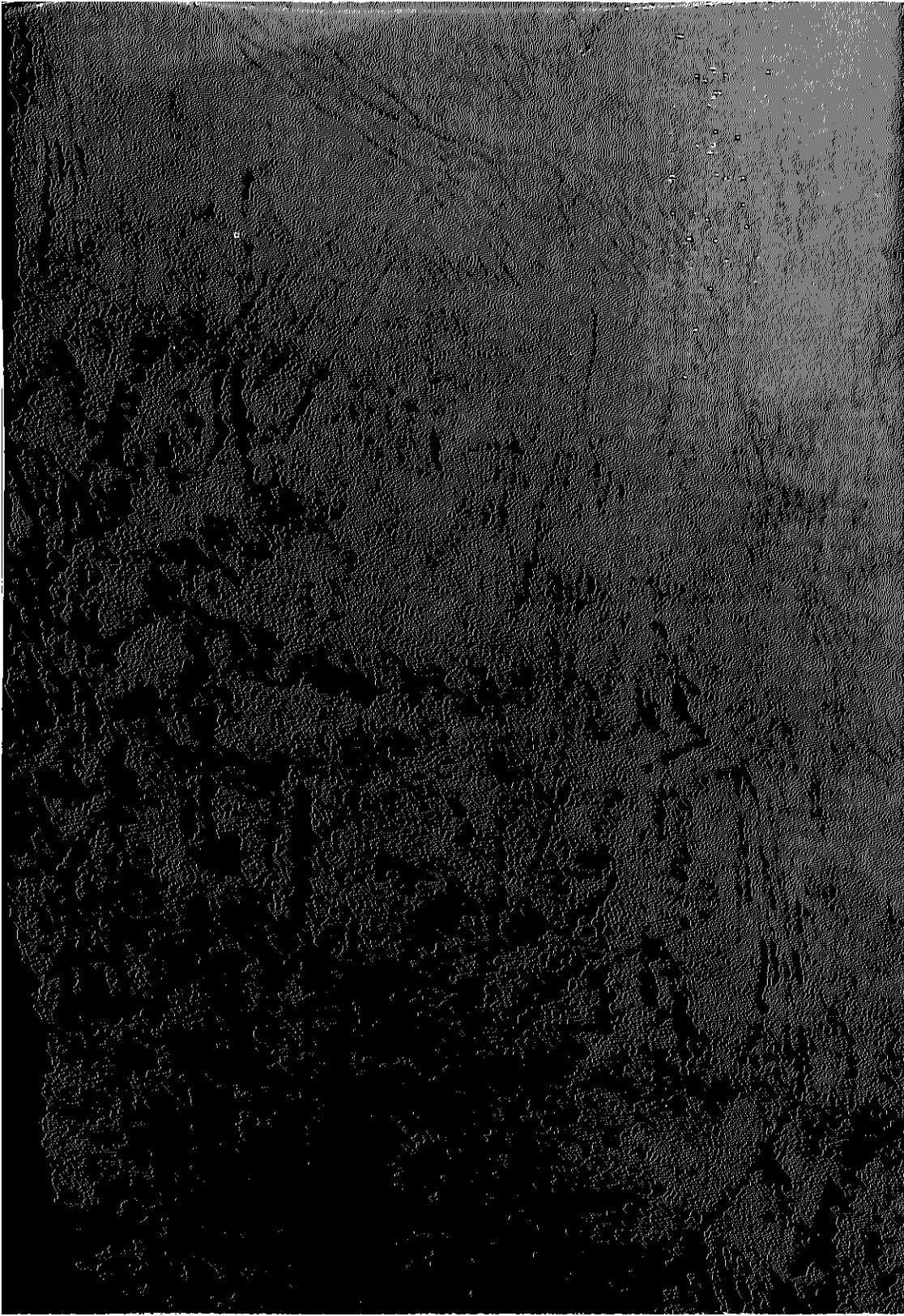


昭和54年度

# 都倫研紀要

第18集

東京都高等学校「倫理・社会」研究会



# は じ め に

会長 増 田 信

先生たちの話を聞いていると、生徒にはずいぶんできる子とできない子の差があるけれども、先生はみんなそろって聡明者ぞろいのように聞こえます。また先生は教える者、生徒は学ぶ者と、その役割はきまっているとわんばかりです。できるとかできないとかいっても、それは学校時代だけの格付けで、学校を出れば、そんなことはいわれなくなるということは、だから学校時代のできるできないなど、たいしたことではないんだという教訓になります。それはそれとして、先生は生徒に対して、いつも自分を完全の位置におくという職業的習性に、ここでは注目したいと思います。

しかし客観的には、決してそんなことはないのであって、先生にもずいぶんできる先生とできない先生がいて、先生もまた大いに学ばなければならないといわれます。そして学ぶということにおしまいはなくて、どんなベテランといわれる先生であっても、学ぶことをやめてもいいということにはならないようです。もちろん先生の中には、そのことを十二分に自覚している人はたくさんいますので、先生たちのおしゃべりに出てくる完全主義的口ぶりと、心の中の研究熱の燃えぐあいとは、おのずから区別されるべきものなのでしょう。まだずいぶん怠け者で、給料のためだけに先生をしているという人が、ほくらの周りに一人もいないとはいえないのは、残念というほかはありません。

ほくらのこの研究会は、勉強する団体でありたいということで発足しました。そしてその実績をあげてきました。ことしもここに、ことしの勉強の成果をまとめあげることになりました。参加された先生方に敬意を表するとともに、上来述べてきたことは、誰よりもまず会長たるほく自身のことと、省みて忸怩たる思いをする次第です。

# 目 次

は し が き .....	1	
I 研究主題と研究体制 .....	4	
研究分科会参加者名簿 .....		
II 研究会の全般的活動の概要 .....	9	
III 研 究 報 告 .....		
(1) 特別分科会「現代社会の研究」 .....	12	
研究経過報告 .....		
社会科における「現代社会」の位置づけ 育山高 小川一郎 .....	13	
(2) 第一分科会「現代と人間」		
研究経過報告 .....	18	
①カミュ「シーシュポスの神話」をよむ—グループ読書—		
京橋高 飯岡祐保 .....	22	
②学力と生徒の意識構造—工業高校における数学の学力を		
手がかりに .....	荒川工高 及川良一 .....	26
③現代社会と自我の確立—モラトリアム人間の時代		
育山高 小川一郎 .....	32	
④組織と人間—テープ教材による具体的展開例—		
鷺宮高 木々木誠明 .....	37	
⑤デカルト「方法序説」を読んで .....	41	
(3) 第二分科会「思想の源流」		
研究経過報告 .....	46	
①生徒の意識にレスポンスした指導の試み		
大森東高 木村正雄 .....	49	

②善藪の慈悲について 田園調布高 寺嶋甲祐 …… 53

③「倫理・社会」と大学入試問題について  
駒場高 細谷 斉 …… 59

④個人の適性と能力に応ずる授業の工夫  
大森高 吉澤正晶 …… 65

#### (4) 第三分科会

研究経過報告 …… 69

①倫社の基本概念をあらためて考える授業展開  
豊島高 葦名次夫 …… 71

②中井正一と『美学入門』について — 芸術と人生の試み —  
玉川学園高 新井徹夫 …… 84

③近代日本の思想〈大正デモクラシー〉  
吉野作造 — 民本主義 — 東 高 井川哲夫 …… 88

④「現代社会の特質」で用いる映画の話題の工夫  
日野台高 菊地 堯 …… 92

⑤授業展開の方法のための試案(その2)  
— 現代思想の位置づけをめぐって —  
帝京商 近藤 卓 …… 96

⑥江戸時代の儒学の展開  
— 荻生徂徠を中心として — 蒲田高 徳久 寛 …… 100

IV 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約 …… 104

事務局だより …… 108

あとがき …… 109

# I 研究主題と研究体制および

## 紀要の編集方針

研究部長 海野省治(三田)

研究副部長 渋谷紀雄(墨田川) 徳久寛(蒲田)

### 〔本年度の研究主題〕

生徒の意欲を高める授業展開の工夫

### 〔研究主題設定の趣旨〕

「倫理・社会」の科目が設定されてから、すでに17年の歳月がたった。この間、都倫研では、さまざまな角度から「倫理・社会」を高校社会科の一科目として定着させ、また、生徒に科目の内容を理解させるよう研究を重ねてきた。

ところで、昨年(昭和53年)の8月に、新学習指導要領が発表され、57年度から社会科の必修科目として「現代社会」が置かれることになった。当研究会としては、現行「倫理・社会」研究のこれまでの成果をふまえて、さらに科目としての内容の充実をはかると共に、一方「現代社会」への移行についても検討していく必要にせまられている。

現在の「倫理・社会」という科目が消滅することに私達は、とまどいを禁じえないが、新しい「現代社会」への飛躍を考えつつ、現行の「倫理・社会」のより一層の充実をはかっていくことが当研究会の使命であろう。

いずれにせよ、現代の高校生の実態にかんがみて、彼らの「倫理・社会」への意欲をより一層高める工夫が必要である。そのためには、科目の内容を精選し、新しい素材を教材化し、授業内容、授業展開の工夫をしていかなければならない。そしてその際、例えば新学習指導要領の発足との関連で、「ものの考え方の基本的問題」などに着目することも考えられよう。

こうした「倫理・社会」のかかえている課題を考慮に入れて、今年度の研究主題を「生徒の意欲を高める授業展開の工夫」としたい。

## 〔研究体制〕

第一分科会 「現代と人間」：（例えば、「組織と人間」、「社会と人間」、「青年と人間」など）

第二分科会 「思想の源流」：（日本を含めて）（例えば、「智への愛」、「善と実践」、「宗教と人生」など）

第三分科会 「近・現代の思想」：（日本を含めて）（例えば、「個人と国家」、「芸術と人生」、「民主主義の倫理」など）

特別分科会 「現代社会」の研究：（内容構成、「倫理・社会」との関連性、実施上の問題などの検討）

従来から分科会構成は、分野別かテーマ別かのいずれかによって設定されてきた。今年度は分野別の構成をすることになるが、各分科会では、例えば「ものの考え方の基本的問題」などをふまえて研究活動を展開していただければと思う。

具体的には、(1)内容の精選をはかり、新しい素材（図書のみならず、TV、ラジオなどの番組や漫画など）を発掘し、(2)授業展開にあたっては、生徒の意欲を高めるための工夫（発表、グループ＝ディスカッション、テープの利用など視聴覚に訴える方法、図式化、読書会など）について検討する。

各分科会の成立の時点で研究の方法についてさらに検討していただき、爽りある研究活動を今年度も活発に行っていただきたい。

（昭和54年6月8日）

## 〔紀要執筆要項〕

### ＜執筆のねらい＞

54年度の研究主題——「生徒の意欲を高める授業展開の工夫」——についての各分科会における共同研究および個人分担の研究レポートを具体的に、自由に執筆して下さい。

執筆の際に、授業内容をどう精選し、どのような新しい素材を発掘した

かということや、授業展開にあたって、生徒の意欲を高めるための工夫や方法についての具体例に特にポイントを置いて下さい。

〈各分科会の研究経過報告〉

各分科会の世話人は、分科会の研究活動の経過をまとめて下さい。各分科会毎にどのような研究がなされ、又どのような意見交換がなされたか、各分科会のそれぞれの雰囲気を具体的にご報告下さい。……2頁程度

〈個人分担研究レポート〉……………平均4頁

1. テーマ(サブタイトル等)

2. ねらい このテーマをとりあげた理由 …………… 0.5頁  
及びテーマの学習のねらい

3. 展 開 …………… 3～4頁

(1) 小項目をいくつか立てて、できるだけ実際の授業場面を想定した内容にして下さい。

(2) 参考文献、資料などからの抜粋の場合には、頁等をわかりやすく示して下さい。

4. ま と め

○指導上の留意点や今後の課題などをもってまとめとして下さい。

(昭和54年12月14日)

## 研究分科会参加者名簿（五十音順）

※印 分科会世話人

○印 特別分科会世話人

### 〔第1分科会〕（現代と人間）

秋元正明（学大附） 飯岡祐保（京 橋） 市川仏乘（駒 沢）  
市野武男（向島工）<sup>※</sup>及川良一（荒川工） 大塚博司（順 天）  
勝田泰次（本 所） 小川一郎（育 山） 小河信國（板 橋）  
幸田雅夫（玉川聖学院）<sup>※</sup>佐々木誠明（鷺 宮） 渋谷紀雄（墨田川）  
杉原 安（保 谷） 館入慧子（共立女） 永上肆郎（府 中）  
原田 健（稻 城） 溝上誠司（関東女） 宮形晃太郎（科学技術）  
渡辺 勉（上 野）

### 〔第2分科会〕（思想の源流）

市川仏乘（駒 沢） 内田君夫（攻玉社）<sup>※</sup>海野省治（三 田）  
岡田春生（桜美林） 木村正雄（志 村） 寺嶋甲祐（田園調布）  
速水政明（町田女） 細谷 斉（駒 場）<sup>※</sup>三宅幸夫（祐 工）  
吉澤正晶（大 森） 吉田道雄（保 谷）

### 〔第3分科会〕（近・現代の思想）

葦名次夫（豊 島） 新井徹夫（玉 川） 井川哲夫（東 ）  
井原茂幸（府中西） 大木 洋（工 芸） 菊地 堯（日野台）  
木立正敏（葛西南）<sup>※</sup>河野速男（野津田） 小島恒己（新 島）  
小林豊実（大 崎） 近藤 卓（帝 京） 坂本清治（白 鷗）  
佐藤 勲（城 南） 田原 （篠 崎）<sup>※</sup>徳久 寛（蒲 田）  
中島康夫（練 馬） 平林堅一（園 芸）

〔特別分科会〕（『現代社会』の研究）

秋元正明	羣名次夫	新井徹夫	飯岡祐保	井原茂幸
市川仏乗	内田君夫	○海野省治	及川良一	○大木 洋
大塚博司	小笠原悦郎（日大二）	小川一郎	小川輝之（清瀬）	
小河信國	菊地 堯	木村正雄	幸田雅夫	河野速男
小島恒己	小林豊実	近藤 卓	坂本清治	佐藤 勲
杉原 安	寺嶋甲祐	徳久 寛	永上肆郎	中村祐二
沼田俊一（戸山）		細谷 斉	御厨良一（北野）	
三宅宣幸（開成）		吉澤正晶		

## Ⅱ 54年度の全般的活動の概要

〔第1回〕 6月8日(金) 総会・研究発表大会 於東京都教育会館

### 1) 総 会

会 長 換 拶

前会長 岡本武男氏

新会長 増田 信氏

昭和53年度会務報告 都立清瀬高校 小川輝之氏

昭和53年度決算報告並びに監査報告 同

昭和54年度事務局人事並びに役員選出 同

昭和54年度事業計画案審議並びに研究計画案審議

都立三田高校 海野省治氏

昭和54年度予算案審議 都立清瀬高校 小川輝之氏

### 2) 研究発表並びに研究協議

「昭和53年度の研究活動の総括」 都立城南高校 佐藤 勲氏

「現代家族について — グループ学習を中心に」

### 3) 講 演

都立東高校 井川哲夫氏

「人類生存のモラル — フランクフルト学派とその発展」

東京理科大教授 小牧 治氏

### 4) 分科会の結成

第一～第三分科会, 特別分科会

〔第2回〕 6月25日(月) 第1回例会 於 都立蒲田高校

### 1) 公開授業

「仏教 — 資料を用いた最初の授業展開(1年生)」

同 校 徳久 寛氏

### 2) 研究発表・研究協議

○ 公開授業について

○「年間学習指導計画における現代思想の位置づけ」

私立帝京高校 近藤 卓氏

3) 講演

「ギリシア思想と人生論」 筑波大学教授 堀田 彰氏

4) 分科会活動

〔第3回〕10月19日(金)第2回例会 於 都立本所高校

この日は、関東地方を直撃した台風19号のため、午前10時頃より風雨共に強くなり、都立本所高校をはじめとして、ほとんどすべての学校が、下校の処置をとった。又、国鉄・私鉄共に昼すぎより相次いで運転を止め、交通機関はマヒ状態となり、第2回の例会も参加者は9名程であったため、中止とした。但し、暴風雨について集められた方々や、研究発表の資料をたずさえておいで下さったICU高校の岡田典夫先生の熱意もあって、以下のような研究活動は行った。

1) 研究発表、研究協議

○公会(予定であった)授業について 同 校 勝田泰次氏

○「帰国子女と倫社教育」 ICU高校 岡田典夫氏

形の上では中止としたが、上記のような活動を行い、特に岡田氏の発表を中心にして、熱心な意見交換が行われた。

〔第4回〕11月22日(木)・23日(金)全倫研秋季大会と共催

第3回例会 於 都立白鷗高校

1) 全体協議

「社会科における『現代社会』の位置づけ」

問題提起 千葉県立小金高校 石川久博氏

” 東京都立育山高校 小川一郎氏

2) 公開授業

「浄土教とその背景」 東京都立白鷗高校 加瀬晴康氏

「功利主義」 同 校 坂本清治氏

「ローマの政治」

同 校

飯田國雄氏

3) 公開授業についての研究協議

4) 分科会協議

第一分科会 「倫理・社会」の成果と「現代社会」の関連性

第二分科会 「現代社会」のねらいと生徒の意識

第三分科会 「現代社会」の内容構成と年間学習指導計画

6) 記念講演

「現代思想における実存主義の問題点」

早稲田大学教授 松浪信三郎氏

7) 臨地見学(11月23日(金))

平林寺 — 三富新田 — 吾多院 — 城下町・蔵造り

[ 第 5 回 ] 2月22日(金) 第4回例会 於 都立保谷高校

1) 公開授業

「日本近代における漱石の位置」

同 校

五味 誠氏

2) 研究協議

○ 公開授業について

○ 「日本」と「日本人」への二つのアプローチ

鷗友学園女子高校 吉野 明氏

3) 講 演

「日本近代における自我意識の相剋」— 漱石と鷗外を中心に

中央大学教授

生松敬三氏

1948

1948

## 特別分科会「現代社会の研究」 経過報告

都立工芸高校 大木 洋

ともかく新指導要領が公示され、様々の異論を背にしながらも「現代社会」は昭和57年度施行を目指してスタートした。都倫研は昨年度は「新指導要領の研究」分科会に於て新指導要領案の問題点を討議したが、公示後は「現代社会」の構成にテーマをうつし研究活動した。本年度の当分科会ではこれを引き継ぎ「現代社会」の具体的内容の検討を軸として活動した。

第一回分科会を9月11日、三田高に於て開いた。海野・吉沢両先生に、「現代社会」構成私案を発表して頂き、それに対し自由に意見を述べあった。海野先生案は、新指導要領の「2.内容」に基本的に沿ったものであり、その中で、「人間生活における文化」の箇所は日本史、地理等の角度から取扱えるのでは等いくつかの指摘がなされた。吉沢先生は、(1)現代社会の基本的な問題を略し、(2)現代社会と人間の生き方に関する構成私案を自身の「教育内容現代化指導資料集」を用いて発表した。項目は新指導要領に沿って設定し、各項目に細かい「教材化の視点」をつけ工夫した。例えば「世界の諸地域の文化と文化交流」では文化人類学の成果、比較文化論的考察等と関連させうる、又「日本の生活文化と伝統」では民俗学等の成果民俗文化財の活用等が考えられる、等多くの指摘をされた。

第二回分科会は10月5日、駒場高に於て開かれた。当初「現代社会」内容構成私案を5名の方に発表してもらう事を予定していたが欠席されたため細谷先生が今夏出版予定の「現代社会の内容構成・展開例」の基本項目を紹介し、これをもとに活発な討論を行った。「新指導要領通りに授業をやって生徒は分るのか」「新指導要領自体が近いうち改定されるのでは」「『人間生活における文化』を(1)の現代社会へ入れる等大巾に項目を入れ替える必要があるのでは」等たくさんの意見が出された。来年は会合を増します。

# 社会科における「現代社会」の 位置づけ

都立育山高等学校 小川 一郎

## I 「現代社会」を考える視点

### 1. マクロ的視点から考える（制度・生徒の発達からの視点）

「現代社会」は、57年度からスタートする。社会科の総合科目として、低学年における共通履修の科目として、教育課程審議会の答申による要請から誕生することになった。この科目については誕生のいきさつが意外に大切のように思う。答申の柱の一つが、基礎的基本的知識をしっかりと、たたき込んだ上で、それぞれの生徒の進路、適性能力に応じて、大幅に選択させる、ということがある。この結果、「現代社会」が生まれ、「理科Ⅰ」が生まれた。だから、制度的な必要から誕生したとってよいと思う。昭和38年に発足した「倫理・社会」については、社会科の各科目にない人間の内面的なものに、また、人間に目を向けさせる必要がらうまれたのであり、誕生のいきさつは非常に異なるように思う。従って、制度的な必要からうまれたといういきさつを念頭に、この科目を生かすように、社会科の中の一科目として位置づけることが、現場にある教師の努めであるように思う。

「現代社会」の位置づけをする場合、三つの面から考えたい。

- 1) 社会科の基礎科目的意味
- 2) 社会科の選択科目の準備科目的意味
- 3) 小中社会科の総合・完結的意味

以上の三つである。

1) 基礎科目的意味であるが、答申でいう国民として必要な基礎的基本的な内容を、社会科として考えなければならないのである。いわば、社会科としておさえるべきミニマム・エッセシャルズである。学習指導要領（目標）

では、これについて「現代社会とそこに生きる人間に関する基本的問題」と表現している。この具体的な中味については今までの社会科の各科目の実践の中から、明確にしていかなければならないだろう。何が最低限国民として必要なのだろうか。

2) については、選択科目の準備科目として考える側面であるから、社会科の選択科目との関連を考える必要がある。しかし、必ずしも、社会科の他の科目をすべての生徒は選択しないことも考慮に入れておかなければならない。

どのように選択科目への興味や関心を育てていくか、という学び方や方法時側面について研究が必要になろうし、高校1年生で学ばせるのだということも、頭に入れておく必要がある。

3) については、小中学校の社会科の各科目の総合科目であり、高校で選択科目をとらない生徒にとっては、社会科として完結的な意味がなければならぬ。指導要領でも、「広い視野に立って」とあり、中学校の各科目の学習成果を生かすように配慮されている。社会科において養うべき能力と態度を、学習の成果を利用しながら伸ばすことが、目標にかかげられているのである。

## 2. ミクロ的視点から考える（現行科目からの視点）

戦後、社会科が発効してから、科目にもいくつかの変遷があった。その時々々の要請にこたえたものと考えられるが、「現代社会」の前身としては、「政治・経済」「倫理・社会」がもっとも近いものといえよう。というのは、教育課程審議会の答申に、必修「社会」について、その内容にふれたところで「その内容については、人間の生き方に関する倫理的な内容、現代社会の政治や経済に関する内容のほか……」となっている。

そこで、ここでは、「倫理・社会」の経験から、考えてみたい。ミクロ的としたのは、教えるものの現場からの発想、科目の論理、教える専門家

としての発想を表現したもので、もっといえば、「こういう中味（内容）であると効果ある学習ができる」といったほどの意味である。

次の三つの側面から考察したい。

- 1) 内容的側面
- 2) 方法的側面
- 3) ものの見方、考え方を育てる側面

以上の三つである。

1) については、具体的なものに即して考えさせる必要性を痛感する。そこで、その具体的なものの学習として、思想家の学習が欠かせないのではないかと思う。これは、もちろん、「現代社会」の(2)「現代社会と人間の生き方」の部分についてであるが。

その理由としては、この領域を単なる徳目主義や情操教育にしないためである。生徒たちが「主題的また課題的な学習」をしていくうえで欠くべからざる知的理解をかえて積極的にあたえていく必要があると思うからである。

そこで、思想家学習をとり上げるのであるが、全倫研、都倫研調査などから、どのような思想家を取り上げたらよいか、探してみると、四聖人を含む数名の思想家があげられる。

○教える必要のある思想家 54年度全倫研調査（教師対象）

四聖人、マルクス、カント、親鸞……

○授業で得たと思う思想家 44年度全倫研調査（生徒対象）

福沢諭吉、四聖人、カント、マルクス……

○印象づけられた思想家 51年度全倫研調査（生徒対象）

四聖人、マルクス、ルソー、キルケゴール、ニーチェ、カント……

以上、いくつかの調査をあげてみたが、孔子、釈迦、イエス、ソクラテスの四聖人はいずれの調査にも顔を出しており、教材には適当と思われる。

すなわち、これらの先人については、その「時代背景」「生涯」「思想

(一部分)」にわたって、ある程度くわしく学ばせ、思想家としてのおおよその全体像をつかませるくらいまでもっていきたい。思想家を学ばせることは、人間と社会について、学ぶ総合学習の意味があり、後の社会科にかけていた、人間内面性を学ばせることにもなるからである。

2) 方法的側面については、生徒の興味・関心にかかわる授業を頭におく必要がある。それは、主題学習ないし、課題学習においてもっとも効果をあげることができよう。

都倫研の40年度の調査から、生徒の関心を持っている事項をぬきだしてみると、

幸福、愛、友情、生と死、自由、平和、孤独、宗教、性格、人格、芸術……などがあげられる。

方法の問題としては、生徒の主体的な学習となるように心がけることが大切である。具体的には、発問のある授業、質問の出る授業、生徒の発想にかかわる授業が大切にされなければならない。

3) ものの見方、考え方を育てる側面については、簡単にふれるが、授業の中に、必ず自分がいること、社会の中に自分がいること、すなわちみずからを知り、みずからのあり方を求める力を育てることを、忘れてはならない。具体的には、中学校で学習した成果を生かすような授業が大切であると思う。

## Ⅱ 「現代社会」を生かすために

「現代社会」については、いろいろの批判があるが、発足がすでにきまっている以上、できるだけ「現代社会」を生かすように努めるべきである。

次にその方策について、四つばかりあげてみた。

1. 具体から抽象へと授業のすじみちとする。

身近な具体的な社会的事象から考えさせる。具体的人間から考えさせる。そして一般的抽象的なものへ思考がすすむように配慮する。

2. 中核的な内容の完全な理解と他の内容との関連をはかる努力をする。  
その中核的なものに何をすえるか、担当する先生により異なるであろうが、それについては、どこからでも入ってイけるし、どのようにでも発展させられるように配慮する。

3. 生徒の自発的、主体的学習のための創意・工夫をする。  
生徒の発想や問題意識を大切にしたい。いろいろな方法が探究される必要がある。

4. 一人で担当する努力をする。  
一つのまとまった科目である以上、一人の教師がこの科目を自分のものとして、教えるように努力することは、当然のことである。

おわりに述べさせてもらうと、この「現代社会」について、系統性がないという批判があるが、確かに四つの科目の寄り合い世帯であることが目につくところがある。この系統性については、戦後の「一般社会」なども批判され、それが「社会科社会」になり、「政治・経済」「倫理・社会」になったといういきさつがあった。

これらの方向に、逆行するような傾向があるので、どのように系統性をもたせ、しかも生徒の課題にこたえるかが、この科目を生かすか殺すかに関係してくるものと思う。

具体から抽象へと言うはやすいが、体験主義に流れてしまったり、客観的な知識の詰め込みになったりする危険性もあるので、一人ひとりの教師が、教材を充分こなして、具体から抽象への努力を傾注すべきものと思う。

# 第1分科会「現代と人間」 研究経過報告

都立荒川工高 及 川 良 一

第1分科会は、3回の会合がもたれ、内容的には「どのように生徒の現実に向ってゆき、どのように生徒の意欲を高めていくか」ということを軸に進められ、興味深い実践例も紹介され、少ない回数ではありましたが、充実した話し合いがもたれたように思います。

第一回会合は、9月6日(木)本所高校にて。出席者は、勝田泰次先生(本所高)、佐々木誠明先生(鷺宮高)、小川一郎先生(育山高)、飯岡祐保先生(京橋高)、渋谷紀雄先生(墨田川高)、原田健先生(稲城高)、そして私の7名。レポーターは、佐々木先生と私。

佐々木先生のレポートは、「組織と人間」についての授業で、学事出版発行のテープを聞かせ感想文を書かせたところ、2つのタイプが出てきた。なかでも「殺し方をもう少し考えた方がさっぱりしている」、「組織に加わっている以上、あのドラマのようなことは仕方がないのでは……………」組織というようなものは、個人之力などたかが知れているし、自分の思っていることもヘタにベラベラいえない、早い話、一人で流れにさからってもしようがないのではないのでしょうか、そのへんはてきとーにすませておけば……………」というようなタイプの感想を述べる生徒に対して、どのように向っていったらいいのかというものでした。

私のレポートは「倫理と同和教育」というテーマで、自他の尊厳を積極的な行動規範にまで高めるといふ役割をもつはずの倫社が、結局は知識の切り売りになってしまい、現実のHRの中では弱者いじめ等が横行しているという悩みについてでした。丁度、佐々木先生が問題提起されたことに相通じるものでした。

以上のようなレポートをうけて、討論が行なわれました。この討論の中で、原田先生が授業で使われた非常にユニークな自作のプリントを紹介され、授業展開の様子を報告されました。原田先生の授業は、さだまさしの歌を教材にしたり、自作のマンガを書いたりという形で、徹底的に生徒の視覚、聴覚に訴え、生徒の内面に切りこもうというものでした。

第2回の会合は10月11日(木) 鷺宮高校にて。出席者は佐々木誠明先生、永上肆郎先生(府中高)、小河信國先生(板橋高)、勝田泰次先生、小川一郎先生、飯岡祐保先生の6名。レポーターは小河先生と永上先生。

小河先生のレポートは、モリスによる13の「生きかた」のタイプについてクラスごとに生徒の意見調査をした結果についてでした。それによると、5年間を通して「享楽型」、「安楽型」の多いのは不変、最近1、2年の傾向として、「多彩型」、「行動型」の増加、特に「協同型」のめざましい伸びがみられるというものでした。

永上先生のレポートは、HR(3年)の生徒に「このごろ思うこと」を書かせたところ、①受験 ②才能、職業、将来、③友、④受験と人生、の4つに分類され、大きな特徴として「現代社会の特色」を「学歴社会」の問題として意識しているところに共通性がみられた、というものでした。

以上のレポートをうけて、現代の高校生のもっている意識について特徴的なことを討論しました。その中で、現代の若者は「やさしさ」を求めており、その「やさしさ」とはかばいあう「やさしさ」であり、何よりも自分に甘いという意味での「やさしさ」であるということが指摘されました。また、フォークも社会に対する抵抗から次第にファッション化したり、3分間スピーチでも、最近は社会的問題についての意見発表はとみに少なくなってきたということにみられるように、かなり個人生活に傾斜しているということが指摘されました。そして、このような生徒に対して、むしろ生徒のフィーリングからきりこんでいくことも必要ではないかと指

摘され、一回目の会合での原田先生のユニークな取り組みが思い出されました。

第3回の会合は12月6日(体育山高校にて。出席者は小川一郎先生、佐々木誠明先生、勝田泰次先生、小河信国先生、渋谷紀雄先生、飯岡祐保先生、原田健先生、市野武男先生(向島工高)、そして私の9名。レポーターは小川先生と飯岡先生。

小川先生のレポートは、さまざまな意識調査をみるかぎり、現代の若者の中に「伝統回帰」と思える現象がみられるが、それは一面的ではないかというものでした。たとえばNHK調査によると<仕事の相手>、<旅行の仕方>等について調査したところ、大正12年生れ～昭和23年生れには「能率志向」がみられ、昭和23年以後生れと大正12年以前生れは「情緒志向」がみられた(高度成長担い手世代と高度成長以後の世代との差でもある)という結果、そしてC.フラナガンの国民性調査で、「大切と思う道徳」について、「親孝行」、「恩返し」が増加し、「権利尊重」、「自由尊重」が減少したという結果、これらの結果は一見「伝統回帰」の現象を示している、しかし、「規格品を嫌い、個性的な感覚を働かせる……流行に敏感でありながら流行をそのまま模倣せず、自分の気に入った部分だけを取り入れる」(坂田稔「ユースカルチャー史」勁草書房)、「やさしいが、冷たく、さめているのでこれをシラケともよぶが、それだけに天下国家の大事があらうと、社会、国家がパニックを叫ぼうと、そう簡単に付和雷同して、集団心理に駆り立てられることもない」(小此木啓吾「二十才は今何を考えているか」Voice.1979.2月号)といわれるように、伝統的徳目への回帰は、決して過去の古いイデオロギーへの回帰などではなく、若者たちの新しい価値感ないし感性からの選択なのではないか、というものでした。

飯岡先生のレポートは、カミュの「シーシュポスの神話」をグループ読

書し、①カミュの人間観と自分自身のとをくらべる。②生きるということ  
を、「よく」生きる、「多く」生きるをくらべながら考える。③自分の生  
活とシーシュポスをくらべながら考えてみる。という点を中心にすすめた  
が、その中で、感覚面でもとらえる、論理の破綻をいいくるめたる、結論  
だけを引き出そうとする、手順をふむことをめんどくさいとする、など  
の考え方やものの受けとめ方が明らかになったというものでした。

以上のようなレポートをうけて、自分には関係のないところでしかも  
を考えない生徒に対して、どのように内面にはいっていったらいいのかと  
いうことを中心に討論が進められました。この回でも原田先生は、徹底的  
に生徒の感覚に訴えることから始める授業の実践例(たとえば、仏教の  
導入として井上陽水の「人生に二度あれば」、キリスト教の導入として、  
フォーレの「レクイエム」を使用)を紹介され、このような倫社教育がい  
いのかどうなのか問いかけがなされました。これに対して、倫社の教材そ  
のものが実は一定の評価の定まったものばかりではないから、いたるところ  
に教材がある、そのような教材を工夫することによって、自分がピンチ  
におちいることを嫌い自分だけは安全な場所にとという心理を打ち破って  
いくことが必要だという意見が出されました。

以上3回の会合の中で常に問題となったのは、「生徒の意識をどう把握  
したらいいのか」ということと「自分が内面から迫られるというところ  
では理解しようとしないう生徒に、どのようにきりこんでいったらいいのか」  
ということでした。その中で具体的に示されたマンガ、音楽の使用という  
原田先生の実践は、逆に生徒の感覚からはいっていくという意味で、実に  
新鮮なイメージを与えて下さいました。また、倫社の教材は一定の評価が  
定まったものばかりではないだけに、生徒の現状にそくした教材の開発が  
求められているということにも気づかされ、実に有意義な会合を重ねるこ  
とができたように思います。

## カミュ「シーシュポスの神話」をよむ

グループ読書——一定時間内に、ほぼ同一の歩調で読み進めてゆき  
プリントによんだことをまとめてゆく形式

都立京橋高校 飯岡 祐保

1. ねらい 一度は原典に訳でもよいからふれさせたい為、文庫本で現代を扱ったなかみということで本書をえらんでみた。よみ方のバラつきや、よみとり方の得手、不得手をお互いに補いあう意味で、四人ずつのグループ読書にした。6枚のプリントのうち後半3枚には、自分の考えを出す問題を作った(以下 3のA、B、C 参照)

2. 展開 文章表現の不十分なもの、考え方のまとまりのないもの等には3の部分を指摘し、再度やり直し、5回以上書き直した者も出たが、ここで、本書が、生徒にとっては現代の問題になり切れない部分があるかも知れないと考えた。以下に参考例をいくつか要約してみる。

A この項全体として「哲学上の自殺」をなぜカミュが嫌うのか今までのまとめとして以下に論述し、カミュは人間をどう考えているか、自分自身の人間についての考えとくらべてのべよ。(以下 Aとして略す)

高野

カミュは人間は、理性だけでは割り切れない不合理的な存在であることを考えていると思うし、それが真の姿であると考えているのだと思う。私も人間はどんな真理でもかならず不合理的な思考につながると思う。そして私は、人間とはたちむかってゆくものであると思う。又、可能なかぎりの論理をつらぬきながら、生きてゆくものだと思う。

B P.90まで読んだことから、自分で考えた「生きる」という事についてまとめてみて下さい。とくに「良く」と「多く」について比較しながら。(以下 Bとして略す)

高野

人間には「良く」生きる……自己に問いかけ反問し、自覚してゆくことと、「多く」生きる……多くの経験をつむことがある。今、現在の私たちには、多くの経験をし、そのことによって、視野を広げ、感受性をやしなっていくことが必要ではないだろうか。

O 自分の生き方(これからと今までを含めて)とシーシュポス(P168から173)との相似性、又は、反対性をのべよ(以下 Oとして略す)

高野

私たちは毎日同じような単調なリズムに入って世の中を生活している。これからは、経験を多くつみ、その中から自分の生き方をみいだすことが出来るかも知れない。その点では、シーシュポスに同意できる。現在は、自分の理性や、感情のままに生活しているのだが……人間は、しらずしらずのうちに矛盾をみとめ、生活しているのかも知れない。

井上

A ぼくは、明証の事実にあくまで忠実でありたいと願っている。その明証の事実とは不条理のことだ。カミュは人間は、いつも不条理な精神をもっていると言っているが、私もそう思う。人によってそれが心の中にあらわれているかいないかの違いがあるのだと思う。しかし、それをのりこえていかに生きるべきか考えるのが、本当の生き方だと思う。

B 自己にうちかつということは、よほど強い人間にしかできないと思うし、といて何もしないで生活することは価値のないことだから、可能な限り多量に生活するというカミュに同意する。

O 現在の生活すべてを惰性によって送っていることも事実である。常に回りの目を気にして、自己主張を明確に現わすことに対し、すくなくならず恥だと思ふ気持を持っている。それが惰性的な生活態度につながっていると思う。

余吾

A カミュは、明証的事実にあくまで忠実でありたいと願っているから、哲学上の自殺は、その答をうやむやにする為に嫌う……たしかに人間は自分の中で真実だとみとめたものをそう簡単にくつがえさない。誰もが自分をすばらしい人物だと考えたいから自分の認めたものを、すべての真実としたいと願っているだろう。

B 「生きる」ことは、自分の在り方を理解し、自分は何をすべきかを一生かかって探し出すことであり、結果はどうあれ答を導き出そうとする努力の過程を重視することだと思う。

C 私は、同じ事をくり返すという行動を、ただ、そのくりかえしが終る時を待ちながらも、ただ惰性でやるという無意味なことをしてしまう。だから石をつみあげたあとに、そのつど、その行動をふりかえるシーシュポスなどは、反対だ。

小田野

A 精神がみずからあかるみに出したものをまえにして退却することを前提としているから。——自分の真の存在理由を認識していなくとも必死に生きるとすれば、それを見いだすのであると思う。

B ぼくは、充実を感じる時が自分にとって「良く」と感じる時で、人生のうちでは、それがいつまで続くとはかぎらない、苦悩し挫折するもの「良く」としなければならぬだろう。「多く」とはどれだけ「良く」なったかということではないか。

C シーシュポスは惰性で生きているのではない。口ではいいあられせぬ希望をもって生きているという点に人間らしさを、ぼくは強く共感する。

林

A 哲学上の自殺をごまかしとするから。私の考えでは、人間というのは常に自分が何であるか、何のために生きているのかを考えながら生きてゆくもので、そうして人間として向上してゆくものである。——すべてを受け入れた上で前進してゆくのが人間であると思う。

B ソクラテズの生き方は人間の本質からすると、誰もが理想として抱くような生き方であるのに対し、カミュのは、人間が生きてゆく上でのすべてのことをひらくめてその中から、何かを得てゆくというような、誰にでもできる可能性のある生き方であるように思われる。

C この不条理の中で、自分の生を反抗を自由も可能な限り多量に感じるとゆうような生き方をするというのなら、私にとってこの生き方は今までならば、その自然を、そして、これからなら教訓を与えてくれるものとなる。

3. まとめ ほぼ二カ月(16時間位)もかければ、と思っていた当初のくろみも、文化祭や、球技祭といった行事が間に入りこむとその度に中断され、プリントは失くされ、といったことで、どんどん授業時数にくいこんでいった、いく度もかき直しさえさせなければ、それも何とかなっただかもしれないが、書きさえすればという安易なよみ方をやめさせたかった為やむをえなかったとも言える。又、この学年は、ほぼ一クラス分は二次募集で入っており、五段階でDにあたる者も多いので、指導には苦労させられた。しかし、二度目の書き直しがおらないとなると、気を取り直して真剣になりはじめ、何度も質問してきて、しまいには、答に近いところまでを聞き出し、やっとのことで書きあげる者も出た。しかし中には、いく度かいてもという者もあり、この教材は適していなかったのではないか、むしろ、「異邦人」をそのまま読んだ方がよかったのだらうかと迷っている。昨年は「ソクラテスの弁明」をやったが、ソクラテスをヒロイズムに酔った人物として茶化してよんだ者等が出た為、むしろ、現代の方がよいと判断した作品であった。

使用図書：カミュ「シーシュポスの神話」 清水 徹訳 新潮文庫

# 学力と生徒の意識構造

～ 工業高校における数学の学力を手がかりに ～

都立荒川工業高校 及 川 良 一

## 1. はじめに

倫社の授業において、生徒の意識の中にくいこんでいくことのむずかしさをいつも思い知らされる。特に「自己を客観的にながめる」という生徒の意識構造の壁にぶつかることが多い。「もし君達がこういう状況に陥ったらどうするだろう」という形のすすめ方ができないのである。自分というものを別な状況において考え、他者の内面的な苦しみ、喜びを知ることによって、自己のあり方を考えるということをしようとしないし、また、できないように思われる。したがって、○か×かの解答だけをもとめたがる。

このような意識構造は、生徒の日常的な学校生活にもみられ、更に戦後第3のピークをむかえたといわれる現代の非行の特質にもつながっていると思われる。現代の非行の特質として、万引きなどの遊び型非行が増えていること、新聞誌上をにぎわすような事件をおこした児童、生徒の周囲の人達の反応が一様に「まさかあの子が……」という反応であること、これらのことは、毎日倫社で接する生徒の意識構造とつながるものがあるのではないだろうか。このような意識構造がどのように形成されてきたのか、低学力が叫ばれている工業高校の生徒の数学の学力を手がかりに考えてみた。

## 2. 低学力の実態 数学(算数)の学力を例にして

荒川工高では、一年の数学6単位のうち2単位を習熟度別のクラスにわけて開講している。このクラスわけのため、入学時に数学の試験(内容は小、中のもの)を行う。次ページに示す表は、54年度入学の生徒に対して行った問題の一部とその正答率である。

問 題	正答率	問 題	正答率
① $0 \times 4 = \square$	92.6%	㉓ 700人の19%は何人か	58.9%
② $0 \times 0 = \square$	81.9%	㉔ 36人は144人の何%か	40.8%
③ $5 \times \square = 0$	93.6%	㉕ 780円の2割5分引は	40.2%
④ $6 \div 6 = \square$	92.3%	何円か。	
⑤ $0 \div 6 = \square$	89.0%	㉖ Aの4割とBの3割が	
⑥ $6 \div 1 = \square$	90.5%	同じとき、AとBの比	27.0%
⑦ 0.3と0.33の大小比較	69.9%	を求めよ。	
⑧ $\frac{1}{5}$ と $\frac{1}{7}$ の大小比較	85.9%	㉗ 百の位の数を $x$ 、+の	
⑨ $\frac{1}{3}$ と0.33の大小比較	70.6%	位の数を $y$ 、一の位の	29.1%
⑩ $90 + 40 \times 2 =$	82.5%	数を $z$ とする3けたの	
⑪ $0.84 \times 2.5 =$	60.7%	整数	
⑫ $162 \div 1.8 =$	68.4%	㉘ $a\%$ の食塩水 $b$ $g$ の中	
⑬ $1\frac{4}{5} + 2\frac{3}{4} =$	75.2%	に含まれている食塩の	23.0%
⑭ $9\frac{5}{9} - 5\frac{5}{6} =$	51.5%	量	
⑮ $8 \times 2\frac{5}{6} =$	58.0%	㉙ 7人が $a$ 円ずつ出しあ	
⑯ $24 \div \frac{8}{9} =$	69.9%	って1個 $b$ 円のりんご	50.0%
⑰ $3 \text{ m } \square \text{ cm} = \square \text{ cm}$	84.7%	を7個買ったときの残	
⑱ $0.45 \text{ kg} = \square \text{ g}$	67.1%	金	
⑲ 5分20秒 $\square$ 秒	93.9%	㉚ $a$ は $b$ より7大きいを	38.0%
㉑ 12分 = $\square$ 時間	58.9%	式であらわす	

(受験者数 326名)

以上の結果を見てみると、低学力の意味が浮かびあがってくる。これは大きく4つにわけられよう。

(1)計算力が低いという意味での低学力

問題例でいえば、⑪や⑫のような問題で正答率が60%~70%なのである。この背景には、最後まで正確にやり通すという集中力の欠如が考えられる。

(2)計算上の約束ごとが理解されていないという意味での低学力

⑩のかけ算を先にすること、⑬⑭の通分の仕方、⑮⑯の分数のわり算、わり算の仕方などが理解されておらず、したがって操作できない。

(3)概念として理解されていないという意味での低学力

これは(2)の意味での低学力の背景をなしているといえる。たとえば、分数、小数の意味が理解されていない。⑳の問題は $700 \times 0.19$ で答が求められるわけであるが、この式は㉑と同じ形式である。㉑の正答率が、60.7% ㉒の正答率は58.9%とほぼ同じであるが、内容としてはパーセンテージの意味がわからない、分数、小数の意味がわかっていないということ物語るものである。したがって、(2)の低学力、すなわち約束ごとがわかっていないということに結びつくのであろう。

(4)一般化して操作することができないという意味での低学力

(3)の意味での低学力から、当然一般化して操作することができない。たとえば㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘の問題の正答率の極端な低さがそれを物語っている。

もちろん(1)~(4)の意味での低学力は、それぞれに重なりあっていていると思われる。これらをまとめると、数学における低学力の本質的な意味は、概念として把握されていないということであり、したがってまた一般化して操作したり、論理的な操作をすることができないということになる。

### 3. 小学校中学年の発達課題

更に、上記の問題からわかることは、小学校中学年からつまづきはじまっているということである。このことは他の調査結果でも指摘されている。だとすれば、小学校中学年の発達課題を考えた時、上記のような本質

的な意味での低学力が人格形成に与えている影響はきわめて大きいと言えよう。

一般に教育心理学においては、小学校中学年において、抽象的・論理的思考が芽生えてくるとされている。個別的具体的事象にとらわれている状態から、その個別的具体的事象についての概念や感性的経験を、それらの特殊性を意味づけている普遍性の下での概念としてとらえ、その客観性を理解することにより、思考操作が構造化され、種々の関係を操作できるようになる時期、それがまさに小学校中学年なのである。

この抽象的、論理的思考力が可能になっていくということは、それ以前のその時、その場の状況に埋没した自己中心性から脱却し、自分に対する自覚があらわれ、自我の芽生えということにつながってゆく。つまり、こうした過程を通してはじめて、青年期の自我の確立ということに結びつくのである。青年期に確立されるべき自我は、幼兒的自己中心性にみられる抽象的自我ではなく、自己を他者との関係で認識できる自我である。そういう意味で、自律した人格を形成していくためには、この小学校中学年での抽象的、論理的思考力をしっかり身につけていくことがきわめて大切であると言えるだろう。更にこの時期に大切なことは、ギャングエイジと呼ばれる時代であることである。抽象的、論理的思考力の芽生え、自我の芽生えというものが、仲間や集団の中のぶつかりあいのためされていくという時代なのである。抽象的な自我がいやおうなしに他者にぶつかる時代なのである。

以上のような重要な時期に、抽象的、論理的思考力の芽生えという発達課題が遂げられてこないと、人格形成に及ぼす影響は大きなものになるだろう。1でみたように、数学においてはつまずきが小学校中学年から始まっていた。しかも、つまずき方が単に計算力の不足ということではなく、むしろその原因となっている「概念として理解されていない」というつまずき方であり、したがって抽象的、論理的操作が身につけられていないという

つまづき方なのである。このようなつまづきが、現実の生徒の意識と行動に大きく反映しているのではないだろうか。

#### 4. 生徒の意識と行動

荒川工高における生徒の日常的な意識と行動の一端として次のようなものが見られる。

- 授業中にガムをかんでいる生徒が多い。かんでいるのを見つけると、注意してすぐ捨てるように指導する。ところがかんでいるのはひとりだけではなく、他にも何人かがかんでいる。こちらの注意に反応を示すのは名さして注意された生徒だけである。自分がみつかって注意されないとすてない、「ガムをかむ」という同じ行為をしていながら、自分の名前が呼ばれて注意されるまでは気がつかないらしい。そして、こういうことが毎回毎回くり返されるのである。
- 授業中、私語（私語といえるものではなく、堂々と大きな声で話している）を慎しむように注意すると、「俺ばかりがうるさいんじゃない」という論法で問題をすり返え、あげくの果てにはこちらにくってかかる。自分がうるさくして、まわりに迷惑をかけていることが、客観的に理解できない、認めようとしなない。
- そうじ当番の順番については、最初にお互いが納得できる形できめる。したがってその時点で文句は出ない。しかし、いざ自分の番にまわってきた時になって「なんで俺がやらなきゃいけないんだよ」と文句を言う。
- 成績不良者に対して補習を行う。自分の進級という重大な問題であるのに全く他人まかせでさぼることが多い。「何とかしてくれるさ」という甘えがあり、きびしくすると「じゃあいいよ、やめてやる」という言い方をする。

以上にあげた例はほんの数例である。一般的には無気力な生徒が多く、すぐにカッとなり、みさかひのつかなくなる生徒が多い。

ここであげた例に共通することは、自己、自分の思っていること、自分のしていることを自覚できないということである。自分というものを一度つきはなして客観的にながめる、反省してみるということができないのである。つまり、幼兒的な自己中心性のままであり、したがって生徒にしてみればごく自然な気持ちで上記のような行動になるものといえよう。以上の視点からみた時、最近よく言われる「幼兒がそのまま大きくなったような生徒が多くなった」という言葉にうなずけるのである。

## 5. 結びにかえて

以上のレポートは、あくまでも数学の学力だけを参考にして考案したものである。しかし、一語文がやたらに多いという国語科の指摘、法則を導き出す段になるとガタッと理解度が落ちてしまうという理科の指摘を耳にするにつけ、他教科でもかなり共通してみられる現象のようである。また、学校教育の問題だけでなく、家庭でのしつけの問題、マスコミ文化にどっぷりつかっている状況、子供の遊びが受動的なものになり創造性がなくなっていることなど、種々の要因がからまりあっていることは当然であろう。

このような意識構造をもった生徒の内面に切りこんでいくためには、どのような教材が求められているのであろう。世界史の授業でのことだったが、人類誕生から現在までの年月と西暦の2000年間という年月を換算してテープで示したことがある。2000年間が10cmであらわされたのに、人類誕生から現在までの年月を示したテープがほぼ教室ひとまわりの長さになるということに実に新鮮な驚きをしめしたのである。生徒の意識構造が抽象的自我の状態にあり、そしてその背景に抽象的、論理的思考力の弱さがあるのなら、抽象化以前の具体的事象（視覚的にも、聴覚的にも）をもって、それまでに形成されてきている生徒の認識を一度解体させてしまう程の迫力のあるせまり方が必要とされているのであろう。

# 現代社会と自我の確立

— モラトリアム人間の時代 —

都立青山高校 小川 一郎

## 1. ねらい

今日、青年期の延長がいわれている。文明社会では、青年期が長いというのが定説である。昔は元服を境に、子どもとおとなが、はっきり区分されていた。なぜ、文明社会ほど長いのか、社会のしくみやはたらきが巨大化し、複雑化し、おとなとして、一人前に社会の役割分担を果たすために必要な能力を身につけるのに時間がかかるからであるという。

此頃、30才ぐらいまで青年期が延長されたのではないかという。少し長過ぎるように思える。青年期の延長ということは、自我の確立も、遅れることを意味するのだろうか。精神的未成熟を意味するのだろうか。自我の確立との関連からモラトリアム人間の時代を考察するのが、このテーマを取りあげた理由である。このテーマとのかかわりから、生徒の自己認識を深めさせ、自己の課題を発見させたい。

## 2. 展 開

### (1) モラトリアムとは、

モラトリアムとは、支払猶予期間のことで、この言葉を利用して米国の精神分析学者エリク・H・エリクソンは、この言葉を転用して、青年期は、研修中の身の上であるから、社会の側が、社会的な責任や義務の決済を猶予する年代である、という意味で使ったのである。

ここについては、授業を進める場合、教師の説明でよいと思う。

青年期は「心理社会的モラトリアム」の年代であることを説明する。

### (2) 古典的モラトリアム心理と新しいモラトリアム心理の出現

この項目については、両者の資料をあげて考えさせたい。

(古典的モラトリアム心理)

資料1. 青年期をモラトリアムとしてとらえる旧来の社会秩序は、当然、自明のこととして古典的な人間一生の年代図式を確立していたのである。

誰でも人間は、このモラトリアム期間を経てオトナになるが、ひとたびオトナになれば青年期のしめくくりの時に選択した自分、その自分と結びついた職業、配偶者、社会組織の枠組の中で、年をとってゆく。……つまり、一方向性の時間進行のベクトルがあって、年をとることと、その個人の社会的、経済的、心理的上昇は同一方向に向うものとみなされていた。……

そして、このようなオトナ側の既成秩序からみると、モラトリアムにある青年の心理は、以上述べた積極的な側面をもっと同時に、未熟で幼い未完成人間のそれであった。

(小柴木啓伍「モラトリアム人間の時代」中公叢書P17～P18)

(新しいモラトリアム心理)

資料2. この動向の第一は、青年期そのものの存在権を、かってみられなかった形で公然と主張する、いわゆる若者文化の出現であり、第二は、青年期の延長である。

まず、第一の動向について述べると、本来のモラトリアムは、青年が、社会的現実から一歩距離をおいて、その自我を養い、将来の大成を準備するという明確な目的をもった猶予期間だったのであるが、もはや現代のモラトリアムでは、そのような目的性は稀薄化し、本来なら社会的現実と対立するはずの猶予状態そのものが、次第に一つの新しい社会的現実の意味をもつようになった。……

では、「古典的モラトリアム心理」の質的变化はいかにしておこったのであろうか。まず、第一にあげられるのは、青年たちにそのような自己主張を促す社会全体における青年期＝モラトリアムの位置づけ、価値の上昇である。……ただ単に「古いものの」継承を目的とするだけでなく、むしろ刻々に進歩し、開発される「新しいもの」の習得、ひいては、「新しいもの」の発見や創造をも目的とするようになった。……この青年期の大幅の延長という社会現象もまた、古典的モラトリアム心理から新しいモラトリアム心理への質的な変化をもたらした種々の要因の産物である。これらの要因としては、……さしあたり、モラトリアム期間中に継承されるべき技術・知識の高度化による修得期間の長期化と、青年期＝モラトリアム時代の居心地のよさである。

( 同上、P21、22、27、28 )

#### ( 資料の扱い方 )

二つの資料を読ませて、新旧のモラトリアム心理を対比させる。この際に、新しいモラトリアム心理が、具体的にどのような姿をとって現われるか、発表させる。

ヒッピーも60年代に現われた新しい若者文化であるが、新しいモラトリアム心理がどうしてヒッピーを生むのか考えさせてみたい。

#### (3) 新しいモラトリアム心理の出現したモラトリアム社会の課題

○新しいモラトリアム心理の出現は、古いモラトリアム心理に下記のような変化をもたらしたといわれる。

- ① 半人前意識から全能感へ
- ② 禁欲から解放へ
- ③ 修業感覚から遊び感覚へ
- ④ 継承者から局外者へ
- ⑤ 自己直視から自我分裂へ

## ⑥ 自立への渴望から無意欲・しらけへ

### ○ 青年期の自我の確立とのかかわり

以上あげた現代青年の心理や行動から、自我の確立に焦点をあて考察すると、

#### ① 自我の分裂

既成社会の継承者より論評者を理想像とするので、実行力をともなわぬ口先だけの批判力ばかりが肥大して無責任な態度をとりやすい。

#### ② 甘えの心理

既成社会に依存しているにもかかわらず、その依存を否認しているので、自立していないにもかかわらず全能感をもっている。そこで、自立への意欲を欠いている。甘えているにもかかわらずその自覚がない。

以上から自我の確立を考察すると、気まぐれで気分屋で、自立への意欲を欠き、野心や理想や大志には縁がない、という心理傾向を示し、精神的に未成熟であることは疑いえない。

#### ( 取り扱い方 )

新旧モラトリアムの資料の比較から新しいモラトリアムの青年の心理を引き出すことをねらって感想を求めたのであるが、どれほどの意見や感想が出たであろうか。時間をかなりとって、ゆっくり生徒の発言を待つことが大切であると思う。生徒の発言が少なくとも、あわてて結論を言うてはいけない。生徒主体の授業になるかどうかの別れ道は、ここにあると思う。

充分、意見や感想を出させたところで、上記の新しいモラトリアム心理への移行、自我の確立とのかかわりへ、しばって授業をすすめた。

次に、新しいモラトリアム社会の課題へ進むようにしたい。

### ○ 新しいモラトリアム社会の課題

① 人間におけるモラトリアム期間の存在意義を根源にさかのぼって再認識する。

② モラトリアムの心理構造と、その心理構造を成り立たせている現

実との境界を明確に吟味すること。

- ③ モラトリアム人間の否定的なものに対する批判と、本来のモラトリアムの存在意義を明確に区別する。

(取り扱い方)

最後に、自分自身の問題とかかわらせて、モラトリアム社会の課題を考えさせることが大切である。それが、青年の自我の確立とのかかわりで、授業を進めることになる。

ここでも、教師なりの結論をもっていることは、大切なことであるが、結論を急ぐことは、禁物である。生徒に充分発言させたい。

最終的に、正確に自己を認識できることが、大切であると思う。自己のありようを把握してこそ、あり方へ向って前進できる。自己の課題がつかませられるからである。

### 3. まとめ

最終的には、自己認識をさせ、自己の課題を発見させることがねらいになるので、十分に感想や意見を言わせることが大切である。

そのため、授業に入る前に「最近の私 — 自分をどう考えるか — 」などのテーマで作文を書かせ、ずい時授業で活用すると意見が出ない時など生徒の問題とかかわらせて授業を進めることができる。

もう一つ大切なことは、モラトリアム人間の時代について、教師自身、充分理解することが必要である。特に、箇条書の部分を充分に理解したい。

参考文献：小柴木啓伍「モラトリアム人間の時代」中公叢書

土居健郎「甘えの構造」弘文堂

# 組織と人間——

## テープ教材による具体的展開例

都立鷺宮高等学校 佐々木 誠 明

### 1. ねらい

「組織と人間」の問題は、いうまでもなく現代社会の大きな問題である。人は誰でも出生から死にいたるまで多くの組織に包まれ、保護されて生きる。しかし、組織はいつでも恩恵を与えるものとして感謝されるとは限らない。それは時として個人の自由意志を制限・束縛するものとして、人の魂のうえに重くのしかかるものである。そしてそのために、人は己れの良心の示すところに従って行動できず、組織の命ずる非良心的な行動にも加担せざるをえないことがおこってくる。そこに人間の一つの苦悩が生まれる。

この問題はとりわけ戦争のときに深刻である。国家という組織に守られて人は生存を保証されている。ところがその国家の名において人殺しが正当化されるのが戦争である。「殺してはいけない」とは十戒をまつまでもなく、今や自明の理である。しかし、戦争は人びとにその逆を強制するのである。したがって、国家に属して良心的に生きようとする限り、戦争は絶対におこしてはならないものである。

今や戦争を知らない子どもたちの時代である。しかし戦争の恐ろしさは変わらない。表面平和な日本であるが、戦争の非人間性をとおして、組織と人間の問題について考えさせたいと思うのである。そのほうがまだ職場をもたない生徒たちには理解されやすいと考えたからである。

そこで、教材としては、録音テープ——アウシュヴィッツ強制収容所におけるユダヤ人大量虐殺のドラマ（学事出版発行）——を用いることにした。それに対する生徒の反応を土台にして、これに適合する授業展開をするのが当初の眼目であった。

## 2. 展 開

① 黒板に「組織と人間」と板書し、今日はこの問題を学ぶためテープ学習をおこない、あとで感想文を書いてもらうことを予告する。

② 先に示したテープを静かにきかせる。(ドラマの部分だけ。)

③ 紙を配って、約20分間、感想文を書かせる。

④ テープの後半解説部分をきかせ、第二次大戦におけるドイツ軍の行動について簡単に解説して、この時間終了。

⑤⑥ つぎの時間には、先の感想文のうち、よいと思われるものをいくつか読ませてともに考えさせる。

⑥ そのあと、とくに戦争(国家の名による人殺しの命令・是認)と、人間の良心(人を殺してはいけない)の問題、職場・職業(企業利益の追求過剰からくる人道の無視)と個人の良心(人をあざむいてはならない、愛・慈悲の心)の問題などに焦点をあてて、生徒に自由討論させる。

⑦ 最後に、戦争を避けるためには、国家の中に生きつつ各自どうしたらよいかの問題を、自己の課題として生きることの重要性を指摘するとともに、組織の中でも自己の良心を貫くためには、まさにその良心の確立こそが自己にとっての至上の課題でなければならないことを示唆して、この授業を終了する。

## 3. 感想文の例

(A) 。以前「ホロコースト」という番組でも、やはりユダヤ人の大量虐殺のことだった。その時はただ、ユダヤ人がかわいそうだというぐらいにしかみていなかった。今日きいたテープは、上の題名のように組織という中で忠誠心が問題になっている。ここでは国家どうしの問題であるが、身近でいえばサラリーマンなんかの組織もこれに似ていると思う。

上の階級の人たちに言われた事をただ黙々とやる。忠誠心は大いにけっこうなことだと思うが、わるいと思った事は断固としてこうぎすべき事だと思う。ドイツ国家においてヒトラーがでた時、なぜ国民がヒトラーを尊

敬し英雄扱いたのかがよくわからない。それにユダヤ人を殺すことが必要だったのだろうか。そのことに対し、国民が一同となってこうぎすれば、どうなっていたらどうか。

やはり、組織に動かされるのではなく、個人の主張を強くもち、みんなでもりあげていくようであれば人間はダメになってしまうだろう。

○あまりにも有名な「ユダヤ人の大量虐殺」の話であったが、私はかつて読んだ「アンネの日記」を思い出した。ひどいのはドイツ人で、ドイツ人はみな心なしのやつらばかりだという先入観があっただけに、ドイツ人が戦争という中で、一つの組織にあやつられ、感情をなくしていたということも忘れていた。しかし、いくら戦争という過酷な状況においても、今のテープにでてきたエルジーさんのように、ただ戦争のために歯車化されて感情を失ってしまった夫ルドルフに疑問をもち、それでいいのかと、大きな打撃をくらう人だっているのだ。人間は戦争の中ばかりでなく、現代においても、一つの組織の中に入ると、それがいったい正しいことか悪いことかがわかっている、その命令に従わなければならなくなってしまうことが多いのだ。ただその組織の歯車としての責任をはたしてさえいれば良いと思いがちであると思う。それもそのように大きな組織においては仕方のないことになってしまうのかもしれないが、その中で単に歯車としてだけの働きをするだけでよいのであろうか。だけれども、それをどうすることもできないのが、戦争の中においても、現代の巨大組織下においても、人間の弱い所だ。

○このようなドラマを見たり聞いたりすると、一般には「人間は弱いものだ」という感想がでる。たしかに弱いものだと思うが、そうさせているのは何かということを考えてみる必要もあると思う。

このドラマの場合は、「命令だからしかたなく」と自分の意志ではないように言っているが、四割はうそだと思う。本当に自分の意志と反対のことをするということは、その裏に何か利益があるか、自分の得になること

がなければ、できないことだ。私もまだ未熟であるから断定はできないが、今はこう思っている。主人公はその四割のうそに気づいていないのかもしれない。私としては、この人に限らず人間を弱くさせるのは、利益に対する欲望かもしれないと思う。

(B) ○殺しかたをもう少し考えた方がよいのではないかと思った。どうせ殺すのなら、くるしませて死なすのより、一しゅんのうちに殺してしまう方がさっぱりしている。

○非常に理解に苦しむ。なにかあのドラマは中とはんばで始まって中とはんばでおわったかんじで何んの感想もわからない。

○組織に加わっている以上、あのドラマのようなことはしょうがないのでは……。組織というようなものは、個人の力などたかがしれているし、自分の思っていることも、ヘタにベラベラと言えない。早い話、一人で流れにさからってもしようがない。そのへんは、てきとーにすませておけば…。

#### 4. まとめ

組織の中に失なわれようとしている人間性を回復するためには、いったいどうしたらよいか。参考書的解説によれば、そのためには①自主性の発揮、②社会的責任の遂行、③人間関係の維持と強化 ④自己実現の行動などがたいせつだとされる。しかし、これでは焦点がぼけてしまう。そこで具体的な歴史的事実を通して、組織と人間の問題を学び、それによって、展開の(7)に示したような課題をしっかりと自覚した人間を育てたいと思うのである。とくに組織の重圧に抵抗し、組織そのものを理性化していくためには、あらゆる誘惑に抗して、ゆるがざる個としての自己の確立こそ、もっとも重要な課題であることを認識させなければならない。しかし、このごろの生徒の自主的発言はきわめて乏しく、さらに感想文(B)例に示されるような生徒がふえつつあるのが高校の現状である。とすれば、こうした生徒にはいかなる指導から出発すべきなのか、日夜苦慮する問題はここにもあるわけで、おおかたの教示を得られたなら幸いである。

# デカルト『方法序説』 (角川文庫)をよんで

都立府中高校 永上 肆朗

## 1. はじめに

「生徒の意欲を高める展開」とはつまるところ授業形態の多様化の工夫につきると思う。ところが、昨年からはじめられた共通一次との関連もあり、現場では教師による有効な講義形式が見直されている面もある。これに徹すればそれなりのくふうがあろう。更に「倫社」がなくなり、「現代社会」と「倫理」に再生することになる。この二つの要因の間にゆり動かされながらも昨今の私は現行倫社を心静かに全うしたい気持で一杯である。私は年間予定の山場を二学期におき、思想書にふれさせることを重視している。今年は表記の著作に取り組んでみた。「原典学習」というと、どうも評判が悪いが、「一冊の本」を全員が学び、思想に直にふれる生の追体験を大事にしたいと願うからである。さて、デカルトといえば、合理論の元祖、近代の機械文明の元凶と批難される点も多い。しかし、本書で生徒に考えさせたい点は「原点に戻って思考させる」ことにある。その目的はおもね達せられた。およそ思想は両刃の剣である。この点をじゅうぶん弁えないと徒らに批判のための批判に終始することになる。まずは謙虚に原典に即して偉大な哲学者の言行に耳を傾けることに重点をおきたいのである。

## 2. どのように展開したか

- ・時間配当 約5時間(2学期後半)第4部まで
- ・夏休みの読書課題とする。
- ・参考配布プリント 『あなたの哲学』(学生社)より一部。『デカルト』(岩新)より一部。『日本学の哲学的反省』(講学文)デカルトへのアプローチの一助として。各クラス担当班に『デカルト』(清水書院)

指導資料 『哲学の復興』（講現新）、『方法序説入門』（有斐閣選書）

・読書のポイントと設問

第1部<書物から世間へ>	各クラス担当2人	関連テーマ
・良識とは何か		・デカルトの生涯と背景
・修学時代のようなすはどうだったか。		
・諸学に対してどんな疑いをもったか。		・スコラ哲学とは
・なぜ旅に出たか		
第2部	・諸学の統一	2人
↓	・デカルトの夢	・30年戦争とは
		・デカルトの関連人物
<炉部屋での思索>・学問の方法をどう考えたか		
↑	(4つの準則)	
第3部	・生き方の方針	2人
	(仮りの道徳)	
第4部<形而上学的懐疑>	2人	
・「われ思う、ゆえにわれあり」についてのべよ。		・演繹法と帰納法
・神の存在証明		・デカルトの理想の生き方
		・デカルトの思想と現代

・担当ページを適当に段落にわけて要約し、板書。読み合わせを行いゼミナール方式。関連テーマもふくめて解説、コメントを加える。→質疑→教師による補足・助言のくりかえし。

(・原文引用・まとめ事項は省略)

### 3. 授業後の読書感想例

デカルトの方法：「われ思う、ゆえにわれあり」という全てを疑うデカルトの姿勢は、勉強に対する私の受身の姿勢にも、マスコミに対する世間の人々の姿勢にも対照的である。たとえばかつてのオイル・ショックや、

「ヘビが人間を4人飲んだ」という報道についてもいえると思う。もちろんすべてを疑い、そこから出発する姿勢を実社会で再現することは不可能とまでは言えないまでも相当困難である。しかし世間の人々は、あまりにも虚偽と思われることまですんなりと信ずる嫌いがある。激動する社会・情報の氾濫する現代においては、デカルトのいう4つの準則を考える時間すらない。……しかし、こうやってものごとを全て疑い、一から始めなければならないところまで社会はきてしまったような気もする。

・とかく哲学書・思想書などというものは、多くの場合、その思想を最高のものとし、それを読者に押しつける型のように思える。しかしこの方法序説はそうではなかった。デカルトは自分の発見した方法によって、自分を最高の状態にまで引きあげられる事を示したから、「必らずしも自分が正しいといいきれない。あくまで、これは教えてなく披露紹介であり、参考の域をでない」といっているが、彼はこの点において、それまでになかった思想に対する新しい何かをもっていたのだろう。…デカルトは先人達の考えが、「何かを無条件で認める」「肯定」であったのに対し、彼は「確証のもてるもの以外は総てを認めるな」という「否定」の立場を取ったのである。この考え方は、現代の自分達に対しても、非常に新鮮なものを含んでいるように思う。

・まず第1部でデカルトが文字による学問、学校で習う学問に対して見切りをつけて旅に出るが、私の思うにデカルトの案外らしいところは、諸学に対し、一応彼なりに有益である面を認め、なおかつ、それを修めたという点である。…これを読む者にとって（学問を修めていない者）、自分には、未だ文字の学問が捨て難いという事、十分な時間をそれに費していないという事を逆に悟らせる結果となっているように思う。

準則：「困難は分割する」これは数学の問題を解くときにもよく言われることだ。実生活でも十分使えると思う。丸のままの大きな困難を見ると私はおじけついてしまうが、少しずつ問題を解決していけば、困難などい

つのまにか消えてしまうと思う。

・今の私たちの学問方法は、このデカルトの規則と全く相反するものではなからうか。1つ1つ確実に知るといふ大事なことを忘れ多くを知る。たゞ多くのものを知る。これでは私たちが疑問をいだいても真理に導かせるわけがないのである。そこまでいかないのである。急がなくてもいいではないか？ デカルトの学問の方法はすばらしいと言ひ、誰もが共鳴する。それなのに今の私たちの「いそぐ、多くを知る」という教育が何故だろうか。ここに私は大きな矛盾、疑いの心を見いだした。

良識：私たちに、物事を考える力があります。すなわちデカルト流に  
いへば良識・理性です。それなのに、私はそれをちっとも意識せずに、本  
を読み、新聞を見、授業を聞いて、意味がわかったときには、ウンウン、  
なるほど、と同じような気持だと思って満足していたのです。私もそして  
一人一人が哲学者でなくてはならないと思います。そうでなかったら、い  
つまでたっても、何か大きなものに押し流されていってしまう気がします。

・彼はこの本で決して人を導くのではなく「今はどこにも存在していない  
理能力の平等な発現を未来においてみんなの手で実現しようではないか」  
と人々に訴えかけている。小生はこれに感動した。なぜならたいいの人  
々は「ああしろ」「こうしろ」と上から言われればその通り動き、何の疑  
問も抱かない。それをデカルトは「みんなで実現しよう。」と言っている  
のだ。この考え方が外的權威の否定につながるのだと思う。

仮りの道徳（格律）：普通、人は生まれた時から、法律の中にいる。何  
も知らずにどこの誰がいつ決めたのか知らないきまりというものを強制的  
に押しつけられる。やがて法律について学校で学ぶ頃にはなれっ子になっ  
ていて適当に目立たぬところで犯したりしている。何故法律に従うのかと  
いう認識がないままに。ところがデカルトのこの第一の格率は自分の生き  
方として、明確に従うことである。つまりしっかりした意識のもので自分  
は法に従うという堅固なものが彼の中にあつたのだ。

・第2の格率が身にしみてわかる。迷わないこと、これは大切なことである。…私達はこれから時として何かのかべにぶつかったときに大きく迷うことがあると思うが、そんな時、これを思い出していきたい。

「われ思う、ゆえにわれあり」：なぜここに鉛筆があるのだろうか、と不思議に思う私。なぜ私が存在しているのだろうかと問いかける私。その私が今こうして考えているのだから私はある。このデカルトの言葉ほど今の私に安堵感を与えるものはなかった。

・今、「近代哲学の父」を知ったのですから今度は「古代哲学の父」といわれるソクラテスの本を読みたいと思っています。この本をよんで私は「ものを考える、それも「徹底的」に考える」ということを学んだ。

高邁：そして私は「高邁」という言葉にとても感激した。あれもできる、これもできるという非決定の自由こそ自由だと思っていた私が自己自身を内的に決定するに至ることが「考える我」のもつ真の自由だということ。こういう自由に到達した自己のあり方が高邁であった。

デカルト：「もしかしてまた私は赤ン坊で母の腕に抱かれながら夢でも見ているのではないかしら」と。それにしてもあまりに長い夢ではあるが、そしてその答は…得られないまゝでいた。すなわち私は「デカルト」でなかったのである。やはりここで凡人と歴史に残る偉大な哲學家との差であろうか。しかし私はここで、結果は違ったけれど、デカルトと同じことに疑問を抱いたことに非常に感激した。時を越えて、しかし同じことに疑問を抱いていたデカルトに一種の親しみさえ感じてしまった。……デカルトは私の偉大な「先輩」である。

#### 4. まとめ

初めて、読書活動に本書を教材にしてみた。ドラマ性のないデカルトのことゆえ、終始不安であったが、第1部から読みすゝんでいくうちに、生徒の多くはかなりの関心を示したと思う。方法的懐疑や、学問の方法など意外に生徒はこれらを身近な問題におきかえて考えたのだろうと思う。

## 第2分科会「思想の源流」

### 研究経過報告

都立砧工業高校 三宅幸夫

第2分科会は、現職の校長2名を含む11名のメンバーで構成されていたが、なにぶんにも多忙な先生方が多く、全員が顔を会わせたことは一度もなかった。しかし、少人数ながらも非常に内容の深い研究がなされたことは、出席された先生方のなみなみならぬ熱意のあらわれであり、今後の活動に大いに役立つことと思う。以下、5回にわたっておこなわれた会合の内容を順を追って記した。

第一回 6月25日(月) 都倫研の第一回の例会が、新設の都立蒲田高校でおこなわれた。例会後、第一回の会合がもたれ、メンバーの顔合せのあと、世話人の選出と今後の運営方法について検討がなされた。世話人は都立三田高校の海野先生と、若いということで都立砧工業高校の三宅があたることになった。以後、私は連絡員としての役目を引受けることになった。研究テーマについては、「思想の源流」ということから、原典にあたるということになり、都立大森高校の吉沢先生が「初転法輪」のパーリ語原典を解説して下さることになった。以後、3～4回の予定でおこなうこととし、また、ベック著「仏教 上」岩波文庫を使うことになった。

第二回 7月9日(月) 攻玉社高校において、第二回の会合がもたれた。この日は、むし暑いうえに、一学期の期末試験の時期とも重なり、悪い条件のもとではあったが、それでも6名もの参加者があり、まずまずのスタートとなった。

吉沢先生が用意された「初転法輪と五蘊無我説」と題するパーリ語をローマ字化した資料をもとにして進められた。はじめに、パーリ語の格変化の説明があったのち、「五蘊」についてからはいっていった。先生が、単語を一つ一つ解説してくださり、そのあと文章全体の意味を考え、そして時折、訳本である「仏教」の部分と比較してみるという方法で進められていった。また、最後に釈迦の教えについて雑談的に意見がかわされた。

第三回 9月21日(金) 第三回の会合は、学園祭の準備で忙しい三田高校でおこなわれた。この時期は、都内の大部分の高校で文化祭が開かれていたこともあって、出席者はわずか3名というさびしいものであった。この日は、前回に引き続いて「初転法輪」の原典について吉沢先生の解説があった。しかし、私も肝腎なところを聞くことができず、残念である。

第四回 10月30日(火) 第四回の会合は、再び攻玉社高校でおこなわれた。今回は5名の出席者があり、また活気を取り戻した感じがあった。この日は、吉沢先生の資料についての最終日であった。また、先生は別の原典資料も用意されて解説されていたが、今回も私は大きく遅れてしまい大部分を聞くことができなかった。

第五回 12月4日(火) 第五回の会合は、前回同様攻玉社高校でおこなわれ、4名の出席者があった。この日は、海野先生が「ソクラテスの弁明」の21Dと29Dの部分についてのギリシャ語原典資料を用意せられ、これにもとづいて進められた。先生の解説がはじめにあり、そのあと全員で内容を考えながら雑談的に意見を交換するという今まで通りの方法でおこなわれた。

以上が、第2分科会の研究内容の報告であるが、私は毎回出席していた

とはいえ、遅れてくることが多く、不十分な面が見受けられるが、その点についてはおゆるし願いたい。

最後に、この分科会に参加してきた私の感想を、この場を借りて少し記してみようと思う。まず第1には、原典にあたることの大切さが、身にしみてわかったつもりである。授業において生徒を指導していく場合、教師がその内容について十分理解していなくてはならない。そのためには正確な内容理解が必要である。今までは、邦訳ばかりに頼っていたが、今回原典に直接触れるにあたり、訳文では読みとることのできない部分があることがわかった。しかし、原典を読破するためには、多くの時間をかけなければならない。その点では、教科以外の面での生徒指導に追われどおしの工業高校の教師にとって至難の業である。それでも、これを機会に暇をみつけては原典にあたる努力をしてみようと思う。第2には、この分科会では若い人達の参加がみられず、私としては非常に残念であった。ベテランの先生ばかりの中に、私のように経験の浅い者がひとりだけいるのも、何となく心ざびしい感じがするものである。是非とも来年度は、大いに新人の参加を期待するものである。

おわりに、第2分科会の世話人として十分なことができなかったことをおわび申し上げるとともに、私をご指導いただいた諸先生方に深く感謝するものである。

# 生徒の感情にレスポンスした指導の試み

都立大森東高等学校 木村正雄

## 1. はじめに

生徒の学習意欲を高めるには、生徒のいまの感情にレスポンスしていくことである。生徒の感情を無視して授業を展開していても空虚な授業になるだけである。生徒の感情無視の授業は知識の切り売りだけの授業になりやすい。倫社の指導目標が知識理解と道徳性の内面化をはかるものであるならば、特に、感情にマッチした授業でなければ内面化は効果はあがらない。しかし、次のような疑問が起る。生徒の感情にばかりレスポンスしていて果して授業になるのかと。騒々しい、落ち着きのない授業になってしまうのではないかと。また、生徒のホンネばかり取り上げていたら、少しも前に進まないのではないかと。生徒を低次元のまゝにほっておいてよいのか、という疑問も出てくる。これらの不安や疑問に対して、私はこう考える。生徒と教師の信頼関係があれば、そのような心配は全く無用であると。以下、私の試みた授業の一部を記してみたい。

## 2. 授業の展開

(1) 授業開始時もその時の生徒の感情に教師はぴったり合せること。

倫社の授業が体育などの授業の直後だと、落ち着きを失ない、ざわめきやすい。そんな時、教師は「運動のあとで気持が落ち着かないようだね」と言っておいて生徒の行動をじっと見る。生徒は「うん、今日はサッカーやったんです。〇〇君、ヘマをしたので、おかげで負けました。」教師「〇〇君のヘマで負けてしまってくやしいというわけね。」生徒「そうなんです。でも、おもしろかったです。」教師「勝った負けたということよりも、それから、〇〇君がヘマをやって困ったということよりも、とにかく、体育の時間にサッカーをやって楽しかったということね。」生徒「そう、そうなんです。さ

あ、倫社の授業しましょう、先生。」教師「じゃ、始めましょうか。」生徒「今日は私の発表です。」生徒「先生、先日の授業の時の質問もありますよ、その質問から入ってください。」教師「それじゃ、今日は先日の質問と〇〇さんの発表という授業でいいですね。」生徒「はい、結構です。」

(2) 質問する生徒の感情・気持を大切にすること。

生徒の質問する気持はいろいろある。先生を困らせてやろうという気持からでてくるものもあれば、わからないところがあるとテストに困るからということからでてくるものもあれば、何となく質問したくなったとか、自分の存在をみんなに認めさせようとするもの、むしゃくしゃした気持になったからうっぶんばらしに質問するなど、さまざまである。だから、生徒が質問した時、どんな気持から質問がでたのか、それをさぐりあて、その気持にレスポンスしていくこと。勿論、質問内容に対する答も適確でなくてはならないが、質問の発した気持をとらえ、それに反射したものでなくてはいけない。そして、その後の反応にも気を配ること、また、気持よく質問ができるように、質問してよかったという気持になれるようにすることが大切である。

(3) 生徒が沈黙している時の気持を大切にすること。

沈黙にもいろいろある。考えている時、無関心でいる時、ほかのことを考えている時、思いつめている時など、さまざまである。そんな時、教師はよく、発言を促すことがある。だまっていなくて、だれか発言しなさい君はどう考える？、さらに、何とかいったらどうなんだ、と指名して無理やり発言を促す場合がある。このような発言は生徒の気持をふみにじるもので好ましくない。はなはだしい時は考えている生徒に対して何も考えていないんじゃないか、発言が少ない、などと逆に考えている状況を見逃してしまうことさえある。こんな時、生徒はもうあんな先生なんか、オレの気持を少しも理解してくれない。倫社なんて大きらいだ、ということになる。沈黙が何分間続いてもその気持を大切にしたいものである。

(4) 私語をしたり、他教科をかくれてやるような、気持が集中していない時、教師は自分の今の気持を素直にのべ、生徒に伝えること。

クラスや生徒によっては私語が多かったり、いわゆる内職をやっている者、やろうとしている者もみられる。そんな時、教師は「〇〇君、うるさくて先生が話しにくいけど」と言えば、生徒は私語をやめる。そして、また、私語をはじめたら、また、同じことを言う。そして、教師は「今、どうしても話をしたいことがあれば、話しなさい。先生はその間だまっているから」と言って話したいことが終るまで、待つこと。そうすれば生徒は「あとで話すからいいです。」といてだまってしまうか、簡単に一言いって終ってしまうものである。その間15秒とかからない。教師がほんの少し待つことで生徒は自然と私語をしなくなるし、教師もどならなくてすむ。

(5) ノートは自由な表現、発想の場到大いに活用する。

生徒の各自持っているノートは大いに活用させる。板書をただ写すのではなく、自分が読んだ本の内容をまとめるとか、友人の話や意見を聞いたものをまとめるとか、自分なりの受けとめ方や考えを書く、見聞の感想を書くなど、いろいろと利用される。その場合、文字ばかりでなく、絵図やマンガ類も許容する。授業内容は倫社の場合、どうしても抽象から具象へ逆に、具象から抽象へと学習する機会が多いので、できるだけ図解などそれも自分なりの考えや解釈で書かせる。しかし、それをそのままにするのではなく、教師が点検して評価してやったり、友人どうして感想を書きあったり、評価したりする。しかし、絶対に書いてならないことは、けなしたり、バカにしたりしないこと、無視しないこと。どんな小さいことでも、どんな低次元のことでも、マツがはずれていても、それをありのままに受けとめることである。ありのまま受けとめることはそれを認めることであり、評価することである。ここでいうありのまま認める、評価するというのは自分なりに書いたものをもとにして疑問をもち、考え、検証し、発展させていくきっかけをつくらせることである。

(6) 研究発表はクラスメートの評価によってさらに意欲が盛り上がる。

当然のことながら生徒の研究発表は生徒が行い、生徒が聞くことになる。だから、クラスメートの聞く態度や雰囲気によって意欲が盛り上ったり、そうでなかったりする。発表が始まる時は、必ずみんなで激励の拍手をする。発表が終わった時点での質問の時には必ず教師も生徒も質問する。最後にみんなでご苦労さまの拍手をする。発表の評価の用紙に、発表内容や発表態度についての評価や感想をみんなで書いて発表者に渡す。それを読んだ発表者はさらに次への意欲を燃やすことになる。

(7) 小論文や作文、感想文などは評価の観点を確認して生徒に示す。

やゝもすると、この種の作品の評価を生徒全体にオール3、とかオール5とする傾向がある。これは平等・公平のようにみえるが、実は必ずしもそうではないと思う。考え方や信念や生きる方向などの内容は各自異なっているのは当然だし、既成の観念にとらわれない内容もむしろ大いに評価すべきである。教師の評価の観点は生徒に明確に伝えておく。例えば、①全体として筋が通っていて論理的であること、②抽象的な言葉だけでなく具体性をもっていること。逆に、具体的なことがらだけでなく抽象的な言葉にもなっていること。③内容が自分の体験や生活がにじみでたものであること。④また、学習した知識と実際の生活を結びつけていること。⑤あたえられた分量、紙面が十分に利用されていること。⑥ものごとをより広く、より深く考えられていること。⑦誰が読んでもわかりやすい文字で書かれていることなどである。

(8) レポート(20枚)を書くことによって学習意欲をさらに喚起する。

レポートを書き終って生徒が「あゝ、終わった」という充実感「もっと研究しよう、疑問がわいた、これを一生の課題としたい」という気持を教師が受けとめることである。ほめることなく認めることである。

### 3. まとめ

学習意欲を真に盛り上げるには知的なものの本質にくだませること。

# 薩の慈悲について

都立田園調布高等学校 寺島甲祐

## 1. はじめに

大乘仏教の教えが、一切衆生の救済をめざす菩薩の道、すなわち菩薩の知恵と慈悲を基本としていることは周知の通りである。われわれが、このような菩薩の道を指導する時、単に縁起の法や六波羅密を概念的に指導しても生徒にはなかなか理解出来ない概念かと考える。西洋の物質、機械文明にあきたらない欧米人が、禪の精神を見ようとして来日し、日本めぐりをして発見するものは、日本における禪精神の不在であり、あまりに非禪的な日本人の生活態度に叱驚りするという話を聞いたことがある。それ程われわれの生活は物質主義的になり、非仏教的になっているのである。このような状況の中で、空の思想を説いて見ても、六波羅密を概念的に指導して見ても、それこそ「直観なき概念は空虚である」という事を実証して見せるようなものであって、生徒を感動させることも、生徒の信念、信条の一助になさしめる事も出来ないかと思考する。そこで考えてみた事が仏像を通しての慈悲の精神の探究指導である。この方面での名著にNHKブックの仏像一心とかたち（望月信成・佐和隆研・梅原 共著）がある事は周知の事実であるが、その著書を参考として指導を展開してみるのも面白いのではないかと考える。

## 2. 展 開

以下、授業の方法については述べず、授業の流れを想定しての書き下しの文書といたしたい。

(1) 仏教徒の礼拝 われわれの大部分は仏教徒である。仏教徒の礼拝はキリスト教徒の祈りのように十字架のみに向って礼拝したり、一切の偶像やご神体崇拝を排除するイスラム教徒の礼拝のようにメッカに向って礼拝す

るのとは異なって、さまざまな仏像に対して礼拝を行なっている。仏教はもともと仏像をもたなかったのであるが、アレキサンダー大王が西インドに侵入（紀元前324年）して以来、ガンダーラ彫刻が発生して釈迦像が造られ、これが全インドに伝播するようになってから仏像をもつようになってきた。さらに、仏像は中国に伝わり、わが国には欽明天皇13年、紀元552年に百済より伝来してきた事は周知の通りである。仏像の造られなかった原始仏教時代には、釈迦の遺骨（これを舍利 Sarira と呼んだ）を分けあい、これを埋めて土を円球状に盛り上げて埋葬し、（その墳墓を率塔婆 Stupa、略して塔婆、塔ともいう）その墳＝塔を礼拝したのである。

インドで有名なサンチーなどは、何びともよく知る場所であるが、わが国の三重塔や五重塔はそのなごりであり、発展であると考えられている。

(2)大乗仏教と仏像　大乗仏教は紀元前一世紀ごろ、一切衆生の救済をめざす運動として、従来の自己救済・自利行を主とする部派仏教に対抗して成立してきたものであるが、仏像の成立によって大きな影響を受けたことも事実である。勿論、大乗仏教の思想が龍樹や無著・世親らの人々によって理論的に確立し、般若経や法華経などの経典によって、その教えが広められたことも明らかな事実であるが、仏教の教えを信仰までに高めるために、仏像の果たした役目は極めて大きいと考えられるのである。釈迦の教えは元来、四諦八正道でまとめられるように、極めて知的で倫理的であり、決して絶対者に帰依する信仰心に基づく宗教ではない。このような釈迦の教えを、宗教の段階にまで高めるためには、釈迦の人格そのものが歴史的な人格から超歴史的、超人格的實在にまで絶対化されなければならない。そしてそのような釈迦に対して帰依する信仰心をもたなければならないのである。釈迦は普通、三十二相八十種好の人間と異なる超人格をもつといわれるが、このような釈迦のもつ特性を更に実体化して仏となし、さらに釈迦の説く教えを実体化して薬師・阿弥陀・大日などの如来として絶対化するのに仏像はなくてはならぬ存在となったのである。勿論、仏像のみなら

ず、釈迦の教えを教典化した多くの大衆仏典の仏が、仏像化に相乗的に作用したことも事実である。しかし、このような教典と造仏との相乗作用が仏教を倫理的な仏教から宗教的な仏教へ変質・変容していく原動力となったと考えられるのである。

(3)釈迦像の部相 さて、釈迦の仏像は三十二相八十種好で現わされるのであるが、他の薬師・阿弥陀・大日などの如来も同じように三十二相八十種好で現わされるので何仏であるかを見分ける事が困難である。そこで仏陀の造仏は両手の在り方によって何仏であるかを決定するように厳しく規定されている。このような手の在り方を「印を結ぶ」とも印契・印相とも呼ぶものである。そして、釈迦の印相は右手を肘を曲げて前肘を平にして前につき出し、指を曲げずに開いて、掌を外に向けている。左手は膝の上に乗せて、同じく指を開いて掌を上に向けている。この印契が釈迦如来の特色であるが、右手の印を施無畏印、左手の印を与願印と呼ぶのである。このように手の形・指の形で、人間存在のあり方を示すのは、インド人の人間に関する知恵であるが、釈迦の像を施無畏と与願の印に造った大乘仏教は、そこに大乘仏教の教えを端的に表象しているように思われるのである。すなわち、施無畏は無畏を施すことで、畏は恐れるという字であるから、恐れること無きを施すこと、つまり不安の除去の事である。与願は願いを与えかなえる事を意味するから、釈迦はこゝでは人間の不安の除去と願いの実現の仏として存在している事を表わしているのである。原始仏教では人間の不安の原因は欲望であり、その欲望を除去する事を教えているが、大乘仏教ではむしろ欲望の達成を肯定しているようにも見受けられる。そこに仏教の変質、大乘仏教の独自の精神が生まれてきた事を知る事が出来るのである。大乘仏教は八正道をもって欲望を滅し、自己の苦を救済することを目的とする釈迦の直弟子たちの教えを否定して、広く欲望をもって悩める人間を救済とすることを教える事を願目とする教えになってきたのである。つまり自利よりも利他を中心とするようになってきたのであり、

施無畏と与願の印は、まさにこのような利他の精神を示す印であって、民衆の不安除去と幸福増進を目的とする慈悲としての仏の在り方を示す印となっているのである。このように大乗仏教は慈悲の立場に立つ事によって、はじめて仏教を現実の社会生活とがっしりと結びつける宗教にする事が出来るようになったのである。

(4) 菩薩像の出現　　このように施無畏と与願の印相をもった釈迦像は大乗的に解釈された釈迦であり、慈悲の精神が釈迦の教えの中心になっている造仏である。しかも、この像で示される慈悲の精神こそ、日本人が仏教を受容する根本精神にもなっているものである。日本人において、大乗仏教はもはや生を否定し欲望を否定する教えとしての仏教であるよりも、生を肯定し欲望を肯定する仏教として受容され、あるいは苦行や戒律による悟りよりも、慈悲による人間の救済を行なう宗教として受けとられ発展させられたのである。釈迦如来像に始まったさまざまな如来像は、釈迦の教えや釈迦のもつさまざまな性格や姿を実体化して仏となしたものであるが、それらはまた、仏教の悟りの最高の境地を表わしたのものである。しかし、このような完全無欠な人格や生命の象徴ともいべき如来像に準じて、大乗仏教では釈迦が仏陀になる以前の修行者だったころ、世の人々の幸福と利益のために尽力したという信仰が何時の間にか発生し、その修行に励む釈迦の修行者としての姿・精神を菩薩像として表わすようになってきたのである。それゆえ、われわれの礼拝する多く菩薩像の本来の意味は、一方では修行に励みながら、他方では大衆を教化するという、いわゆる「上求菩薩、下化衆生」という菩薩行の仏教的境地を表わしたものであると理解する事が出来るのである。特に日本人が菩薩を信仰するに至った大きな要因としては、菩薩の下化衆生の中に現世的利益を誓願するという期待と信仰があった事はいうまでもない事実である。家内安全、商売繁盛極楽浄土などの希求として、あるいは愛児の死後の救済として、観音菩薩や弥勒菩薩、地藏菩薩などが信仰され、親まれたことは論ずるまでもない

事である。

(5)菩薩の慈悲　　しかし、菩薩は如来と異なってまだ人間である。それは仏になろうとして、修業中の人間の姿なのである。しかるに菩薩は如来以上に尊敬を受けているのはどうしてであろうか。それは菩薩が仏になろうとして修業中の事であるというよりは、本来仏でありながら衆生救済のために菩薩となって現世におりて来られたという信仰に基づくようになったからである。ちょうど、神でありながら人類救済のため、神の子として地上に現われたイエス・キリストと同じように、菩薩は本来化の資格をもちながら、衆生救済のため、浄土より現世のえ土に降りて来られて、慈悲の手を差しのべられて居るのであるという信仰が生じて来たのである。それでは日本人に最も親まれた観音菩薩の慈悲について考えて見る事にしよう。

観音菩薩はその像が十一面観音や千手観音などに表わされるように、十三身にも変化して、さまざまな人間のいろいろな苦悩や願望を救済し、実現して下さる菩薩として信仰されている。ある時は忿怒の相で、ある場合は慈悲や暴悪の相で現われて、人々の願い苦悩に応じて救済を施して下さり、千本もの手の力で実行をして下さる菩薩なのである。また、火災などの七難を救い、淫欲などの三毒をまぬからしめ、美しき女性などの二求をたまわる有難い慈悲の菩薩でもある。われわれは、このような有難い観音菩薩にぬかずき、絶対帰依する時、観音菩薩の有難い慈悲のご利益にあずかる事が出ると同時に、自分自身も観音菩薩と一体となる事が出来、菩薩の心を心とする事が出来、安心立命する事が出来るのである。このような信仰が日本人の観音菩薩の信仰であると考え事が出来る。われわれはそこに、日本人の倫理観と信仰心の本源を眺みとる事が出来るようにも思われるのである。菩薩の慈悲に対する尊敬と感謝、希望と安心立命の信仰心はそのまま現実生活肯定への、生肯定への日本人の倫理感ともなっていると考へる事が出来るのである。また観音菩薩の慈悲は無限のやさしさ

でもあるが、それは愛ゆえに子のために、夫のために、身内のために献身的努力をおしまぬ日本婦人の心情とも一致し、婦人による深い信仰の仏ともなっているものである。まことに観音のみならず地藏菩薩のように庶民の段階まで身をいやしくして庶民の中に入って来られる菩薩の姿には、日本民衆の悲願と悲哀の原形ともいうべき姿をみる事が出来るような気がするのである。

### 3. まとめ

以上のように授業を展開して見ると、単に大乘仏教の教えの中心が菩薩の道であり、菩薩の道が知恵と慈悲であり、その理論的思想が空であり、菩薩の行が六波羅蜜であるというように概念的・抽象的に指導して行くよりは、より身近に日本人の考え方でもって理解出来るのではないかと考える。また、菩薩の慈悲がキリスト教の愛とも異なる事が理解できるのではないかと思考する。勿論、慈悲と愛との精神において、異なるものがあるというのではなく、いかなる人をも、またいかなる煩惱をも救済して下さる菩薩の慈悲と、神の愛を信ずる者にのみ愛をそとぎ、信じない者に対する最後の審判をなし、また不正に対する憎悪と怒りとが肯定されるキリスト教の愛との間にはニュアンス以上に根本的な相違があるように感じさせるのである。そして、そこに西洋の正義の文化と東洋の慈悲の文化との相違の源流を見る事が出来ると共に、正義の思想が、正義のための正義の尺度による報復の倫理を肯定する思想になる危険性を察知出来るのである。ここに東洋的な慈悲の文化の思想が、世界の中に蓮華の花のように現われて出て、世界の指導原理になる事が世界平和のために是非必要である事を生徒に指導したいものである。

大部変わった指導例であるかと思うが、参考に少しはなるのではないかと  
思って投稿した次第である。

# 「倫理・社会」と大学入試問題について

都立駒場高校 細谷 育

1. はじめに 従来、「倫理社会」は大学受験と無関係の科目であった。これまでも、私立大学の一部や国立大学の二期校の中に倫社を入試科目として課している所もあったが、実際の受験者は僅少で、あまり問題にならなかった。少なくとも私の場合にはそうであった。したがって、倫社の入試問題などに興味や関心は無かったのだが、この状況は54年度からの共通一次テストの実施に伴い大きく変わった。私の学校でも共通一次の倫社の受験希望者が百名位出るようになった。このことが、倫社教育にとって喜ぶべきことか悲しむべきことか即断し難いが、とにかく倫社も入試と無関係ではなくなった。このようなわけで、はじめて、倫社の入試問題なるものに目を通して見た。以下、いくつかの問題例と感想を書きたい。但し共通一次テストの問題については、各方面からくわしい分析や批判がなされているので、ここでは、国公立大学二次試験と私立大学の問題を対象とする。分析の対象は54年度の入試問題である。

2. 国公立大学二次試験における「倫理・社会」の問題 二次テストで倫理社会を出題している大学・学部・学科は多くはなく、旧二期校の教育学部系が主である。共通一次テストがおおむね平易で妥当なものであるのに比べると、二次テストの問題はかなりむずかしいという印象をうけた。出頭形式は、従来の客観テスト方式の問題を出題している所もあるが、同時に論述・記述問題を出题しており、全体として記述式の傾向が強い。

例1. 次の文章を読んで、下記(ア)、(イ)の問いにまとめて答えよ。

「ヒットラーはナチの集団戦略ともなづけられる新しい方法を発明した。ヒットラーは、本能的に、社会集団の庇護のもとにある人々には

彼の影響力がとどかないことを知っていた。ヒトラー戦略の秘訣は、個人の所属している集団を解体することによって、個人の心のなかにある抵抗力を破壊することであった。彼は、集団紐帯を失った個人が、甲羅を失った蟹<sup>(ア)</sup>に等しいことを知っている。この解体作用は、彼の電撃作戦と同様に、急激かつ過激でなければならない。しかも、この効果を永続させようとする、どうしても新しい集団をつくりあげて、彼自身の政党に喜ばれるような行動を促進させる必要がある。このようにして、ヒトラーの集団戦略に二つの主要な段階ができあがる。すなわち、文明社会の伝統的な集団を破壊することと、まったく新しい集団形式<sup>(イ)</sup>の上に急速にそれを再建すること、である。」

K・マンハイム「ナチの集団戦略」

(ア)「甲羅を失った蟹」という比喻で、著者は何をかたろうとしているか。(イ)「まったく新しい集団形式」の例をあげて、ナチによる社会再編成計画の持ちょうをのべよ。 一橋大

一橋大の問題は例年このようなウルトラC級の難問が出題される。問題そのものとしてはなかなか面白いと思うが、出典、設問とも特殊であり、通常の授業の程度とかけ離れていると思う。

例2. 第一次集団 (Primary group) は、大衆化が進行している現代社会にあって、新たな意義をにないうるにちがいない、といわれる。大衆化の進行にひそむ問題をふまえ、第一次集団の特質にてらしながら、第一次集団はどんな新たな意義をにないうるのか、考えてみよ。

(800字以内)

東京学芸大／小中社会

本問は論述問題として適切なものではないかと思われるものの一つである。大衆社会についての理解と問題点を考える思考力が試されている。

例3. 次の問Ⅰ～Ⅴについて、それぞれ250字以内で述べよ。

Ⅰ 「知は力なり」はフランシス・ベーコンの言葉、「われ思う、ゆえにわれあり」はデカルトの言葉として、それぞれ有名であるが、それらの意味するところの共通点と相異点とについて述べよ。

Ⅱ 中庸の思想について知るところを述べよ。

Ⅲ 和辻哲郎は主著『倫理学』のなかで次のように述べている。「倫理問題の場所は、孤立の人間の意識にではなくして、まさに人と人との間柄にある。だから倫理学は人間の学なのである。人と人との間柄の問題としてでなくては、行為の善悪も義務も責任も徳も真に解くことができない。」和辻氏はなぜ、行為の善悪、義務などが、人と人との間柄の問題としてでなくては解決できないと考えたのか、その理由と思われるところを述べよ。

Ⅳ 日本の伝統的な家族制度は、「いえ」または「直系家族」という概念で説明されることがあるが、それは制度上どんな特色をもっているかについて述べよ。

Ⅴ 新中間層と旧中間層との違いについて知るところを述べよ。

筑波大／第1～3学群

「倫理・社会」の全範囲からよく考えられた出題になっており、単に知識の有無を問うだけでなく、ひとひねりしてある。問題自体は特に難問ではないが、かなりの実力が要求される問題である。

例4. 社会契約説とはどのような思想か、その一般的性格と意義について、また、その代表的思想家数名の主張の特徴について、1000字程度で述べよ。 福井大／教育

例5. Ⅱ 人間の生き方に関するイエス、釈迦、孔子の教えの特色を

比較せよ。(600字以内)

Ⅳ 最近の青少年には生きがい喪失の傾向が見られる、という説がある。これについて君はどう考えるか。(400字以内)

愛媛大/中学社会

例6. これまでの哲学は利己主義を否定してきた。この点についての問いに答えよ。

問1. なぜ利己主義は否定されるのか。

問2. 利己主義が否定される理由は正しいかどうか検討せよ。

福岡教育大/小中社会

例4～6の問題はそれぞれに難点があるように思う。例4は設問が大きすぎて何を書くか解答者は迷うであろう。例5は問題自体があいまいで安直につくられている感がある。採点の基準なども客観性に欠けそうである。例6は哲学上の大問題を簡単に問いすぎている、やはり何をもって正答とするか、定め難いのではないか。問題自体は興味深いもので、倫社の授業中に生徒に考えさせたり、討論させるのには良い問題である。

例7 「他のすべての人々よりも上に出ようとしなない人間は一人もないということ、また、自分自身の善、自分自身の幸福や自分自身の生命の永続を、他のすべての人々のそれより以上に愛しようとしなない人間は一人もないということ、これは何という判断の混乱であろうか。」という言葉がある。この中で言われている判断の混乱とはどのような事を言っているのか。又そのような混乱に陥らないようにするにはどうしたらよいか。600字以内で下に記せ。 山梨大/教育

本問の文意は一度読んだだけではよくつかめない。問題文が悪文であると思う。人間の意識の矛盾について述べていると思うが、受験生の頭の混

乱を招き、回答の意欲を喪失させるような問題ではないかと思う。以上7つの問題について、二次テストの問題の中から論述問題をみたが、どれもなかなかむずかしいといえる。私達の普通の授業のねらいや内容と入試問題はどのようにかみ合うのか、倫社で求める実力とは何か等、改めて考えさせられる。

### 3. 私立大学における「倫理・社会」問題

私立大学で倫社を入試に出題している主な大学を挙げると、東北学院大、駒沢大、専修大、玉川大、東海大、東洋大、中大、日本大、法政大、早大、愛知大などである。但し、これらの大学も、例えば早大の場合、文一や教育、社会科学部だけであるように、特定の学部に限られている場合が多い。いわゆる有名私大の中でも慶応や上智大などでは倫社はない。

私立大学の問題を眺めると、各大学によって出題分野、出題形式、難易度などに顕著な特徴があることがわかる。共通一次テストと異り、私大入試の問題形式には、さまざまな形の客観テストと論述・記述テスト方式がとり入れられている。しかし大学ごとの出題形式は、例えば日大なら日大なりの設問スタイルが毎年踏襲され、ワンパターン化されているようである。次に、私大入試の問題を見ていて気がつくことは、ある書物や論文からの直接、間接の引用文が多いことである。具体例をあげるならば、福武直著『日本社会要論』（東大出版会）が愛知大で、堀部正男氏の論文「アクセス権論」（ジュリスト573号所収）が法政大で、オルテガ・イ・ガゼットの著書『大衆の反逆』が玉川大で、谷川徹三氏の論文「自由について」（『自由人の立場』平凡社刊所収）が法政大で、昭和53年度の「国民生活白書」の一部が早大で、池見 次郎氏の『心療内科』（中公新書）が早大で、中村元選集第19巻『普遍思想下』が駒沢大で、福沢諭吉の『学問のすすめ』が法政大で、西田幾多郎の『善の研究』が愛知大で、そして大塚久雄著『社会科学における人間』（岩波新書）からが専修大で出題されている。このような著作や論文の一部の穴埋め形式の問題というのは

問題作成は比較的容易かもしれないが、良問とはいえないのではないかと  
思う。特にアクセス権などでは、現行の倫社の教科書には登場してないも  
のであり、難があると思う。以上見てみると、私大入試においては、かな  
り高度な知識が問われており、日頃から市広く深い知識を身につけておく  
ことが要求されている。また、私大の入試問題を概観すると、大学によ  
って問題の作成程度に質的な差があることを痛感する。一概にはいえないが、  
世間でいわゆる難関とか有名といわれる大学の問題には、よく考えられた  
良問が多く、逆に程度が低いといわれる大学の場合、入試問題の質も低く、  
安直につくられている傾向がみられる。

#### 4. 55年度共通一次試験問題についての意見

55年度の第二回共通一次試験「倫理・社会」の問題を一読して感ずる  
ことは、54年度の第一回のあり方が踏襲され、おおむね肯定できるもの  
ではないかと思う。教科書の内容や程度の範囲内でつくられており、難問、  
奇問はなかったと思う。もっとも、ほめられる程の良問とはいえない。  
第Ⅰ問の青年期に関する文章は内容に乏しい。第Ⅱ問の社会生活について  
の問題の中で[7]、[9]、[10]、[11]などの設問はあいまいさがあり、適正さ  
に欠ける。設問[11]の定款という語句は倫社には出てこない。第Ⅲ問と第  
Ⅳ問はなかなか良く出来ていると評価できる。難問ではないから、基礎的  
な学習をきちんとやっていたら正答出来る問題であるが、まさに倫社的な  
知識と理解が問われていると思う。第Ⅴ問は江戸時代の儒学と国学につ  
いての問題であるが、これも別に難しいものではない。ただ、すでに指摘さ  
れているように、設問[37]の山崎闇斎を選ぶ項目と、設問[46]の項目は問  
題点があると思う。特に[46]は倫社というより日本史に関する問題となっ  
ている。部分的に難点や問題点はあるが、全体として、このような問題な  
ら、倫社はやさしいという評判が今年も続くのではないかと思われる。

(1月15日記)

# 個人の適性と能力に応ずる授業の工夫

都立大森高校 吉澤 正晶

1. **ねらい** 教育の大衆化が、相手かまわず学習指導の平準化となったのではまちがいである。本年秋、予期せずに、比較的学力のある生徒たちから、15名の名を連ねた書面をもって、「哲学研究同好会」設立につき、その活動の顧問を依頼された。10月より毎週1回の活動が開始された。一方各クラスには約10%と見込む学習意欲のない生徒、基本的学習の習慣のついていない生徒が存在する。前記の生徒は普通の一斉授業では満足しない生徒たちであり、後期は放っておけばドロップアウトする生徒たちである。そしてこれらの中間の生徒たちは、教師の指示通りに概ね学習活動をする生徒たちである。こゝで講義中心の一斉授業だけでは行き届いた授業とはならない。個々人の学習到達度を見とどけ、助言と小課題を与え、また上級の者が下級の者に教えることによる相互の学習効果をはかる、いわば寺子屋式の学習指導法の応用を考えるのである。

## 2. 展 開

(1) 前記哲研で活動する生徒へ 各自設定したテーマの研究図書につき助言、以下の通り。A生徒「哲学とは何か」に対し、岩崎武雄「哲学のすすめ」(講談社現代新書)、B生徒「論語の研究」に対し、金谷治「論語」(岩波文庫)により巻末の索引を用いて、仁・知・徳・礼につき孔子の言を集めて吟味すること、C生徒「老荘の考え方」に対し、森三樹三郎『「無」の思想—老荘の系譜』(講談社現代新書)、D生徒「マルキシズムの研究」に対し、水田洋「マルクス主義入門」(教養文庫)、E生徒「冥想と禅」に対し、関口真大「禅とはなにか」(教養文庫)およびC生徒との研究交流を指示、等々(以下略)。活動は約2時間、司会者輪番で各自レポートを行い、質疑応答、最後に教師の助言というプログラムである。

これを授業中に生かすように、適宜これらの生徒にレクチュアをしてもらう。発表者は日頃の活動でかなり理解を深め説明に練習を積んだものを教室で発表することになり、自信をもちさらに意欲を燃やすように助言する。聴講者には質問を促し、先進学習者に習わせるように指導助言する。発表者には、また部活動に帰って、聴講者の反応と自分の理解と説明に反省を加え、研究を前進深化させるように指導する。

(2) 1時間1テーマを設定して学習をすすめる指導 テーマを設定問形式で示し、1時間の学習のポイントを明確にし、問題を自分で考え自分で解答する態度と能力を身につけさせることをねらいとする。例1. ソクラテスの学習の1テーマ「われわれは人間の本質や価値についてどこまで知っているか、それについてソクラテスはどんな自覚をもったか」例2. 仏教の学習の1テーマ「いろは歌を読んで何を考えるか」(難語には注を付しておき既習の古典から『平家物語』の冒頭の一節を参考資料とする)例3. 同前の学習の1テーマ「すべては移り変わりどまることがないところに、自己の我執をどう省察するか」例4. 孔子と儒家思想の1テーマ「孔子の仁とはどんな心か」例5. 現代と思想の1テーマ「善・正義についてどう考えるか」等々(以下略)。出来るだけ1時間の学習のポイントを明確におさえられるような設問を考えることが一つの要点である。

学習活動の展開として、問題の内容により種々の学習方法を取り入れることを考慮する。

「善・正義についてどう考えるか」(現代と思想の1テーマ)

(1) 指導目標— ア. 善・悪(正・不正)のけじめとその根拠について考察させる。イ. 人間の行動についてその動機があることに気づかせる。ウ. 先哲の考え方の基本的な例について考えさせる。エ. 作業的学習として、ノートの作り方を習得させる。

(2) 指導の展開

	指 導 内 容	学 習 活 動
導 入 5 分	1. 善い・悪い(正・不正)は何を本にしていわれるか。	○日常の具体例をあげさせ、実際の経験から見解を発表させる。(発表又は問答法)
展 開 40 分	2. ソクラテスの「魂の配慮」又は孔子の徳と礼 3. 動機と行動(参考、カントの動機説)	○ソクラテス又は孔子につき復習一善の本末の関係につきノートに要点を記す。(ノート作業) ○カントの動機説について参考させる。(講義) ○日常の行動からその動機を考察させる。(学校、家庭、友人関係などで善や正義を考察(問答法又は討論))
ま と め 5 分	4. 本時の学習のポイント一善・悪は何についていうか。	○人間行動の動機について理解をもたせる。 ○ノートのポイントに下線を引き強調確認させる。(机間を巡視して、ノート上で個人指導)

(3) 指導上の留意点 ア. 先哲の説を知識として与えるのではなく、自分にとっての意味を考察させるようにする。イ. 知識量を増すことよりも、ポイントを把握させるようにする。ウ. ノートを学習指導の基盤とし、ノート上で個人的に試問したり、助言指導を加える。エ. ノートに正確な文字を書かせ、文字と意味を理解させる。

(4) 評価の観点と方法 ア. 本時の設問に全員が一応答えられるか。(試

問) イ. ポイントを把握できたか。 ウ. ノートの語句の使い方図式化  
ど適切か。(以上ノート点検と助言)

(3) 読むこと書くことを基本とする自分のノート作成の習得(学  
習遅進生徒への指導) — 国語教師の所見に、「漢字の読み書きなど  
の基本的な知識・技能の不足、表現の拙さが目立ち、書くことをめんど  
くさがる傾向がある」という。この状態を無視して倫・社の学習指導の効  
果はない。そこでノートを学習の基盤とし、教師の抜書の写しだけのノ  
ートではなく、教科書や資料を自分でよく読み、自分の理解を通してノート  
化することを身につけさせたい。

「あなたが注意深く作り上げたものだけに、書物よりも貴重なのは、あ  
なた自身の書いたものである。……きちんとした書体、平均した余白、気  
に入れば赤インキで、すっきりとした見出しをつけて、ノートを作りたま  
え。……一言だけ言っておこう。講義の単なる筆記で終ってはならない。  
例えば歴史[倫・社]のノートは事実の重要なものだけを書き込むべき  
で、またその事実、あなたの考え出した、授業全部を一目でありありと  
思い出させるような順序に従って配列すべきである。…」(P. フルキエ  
・久重忠夫訳『公民の倫理—入門哲学講義』筑摩書房P. 92)というところ  
を参考資料として、自分のノートを作ることを習得させたい。本年度2学  
期を終って、概ね生徒はノート作成の要領を覚えた。図示、イラストの工  
夫なども、生徒によっては自ら発明している。また文字を書き、文字を覚  
えてこそ、その意味を充分会得できると思われる。字を書くことが一切の  
手仕事の形成の基礎をなし、一切の精神的形成の基礎をなすのが、やはり  
母国語の完全な習得であると思われる。

3. まとめ 適性・能力のさまざまな生徒に対応する一方法として、考案す  
るのは、個人指導に向かい、また先進生徒の後進生徒へのリードを織り込  
んだ、いわば寺子屋式の授業方法の応用展開である。また学習の基本、読  
むことを練習させることである。今後なお、工夫を重ねたい。

## 第三分科会報告「近・現代思想」 （経過報告）

都立野津田高校 河野 速男

6月8日に、本年度の都倫研の総会が開かれましたが、総会終了後、希望する研究分科会別に顔合わせの集まりを持ちました。この分科会に参加された方は総数17名（分科会の希望票を出さなかった方が御一人）でした。この中から世話人として、徳久寛氏（蒲田）と私が選出されました。又この時、この一年間、分科会としてどう言う形式で会を進めんかについての話が出ましたが、（例えば読書会のような形にするのか、発表形式にするのかということ）次会によく話し合うこととし、散会いたしました。これが会の発足、第一回目の集まりでした。

6月26日、この日は夏の近ずきを想わせるよく晴れた日でしたが、都立蒲田高校で、本年度最初の都倫研の第一回の例会が開催されました。蒲田高校は団地の中にある新設校で冷暖房完備の新しい雰囲気になった学校でしたが、そこで公開授業、講演が行われた後、分科会の集まりがもたれました。主として分科会の進行の形式について（前にあげたようなこととか、近・現代思想という中でもさらに具体的な全員の統一テーマをつくったものかどうか等）話し合いました。読書形式は、会員各人のテーマが様々であると思われる所から、本の選定が難かしかろうと云うことで止めにし、結局、会員各自が「近・現代」に関しての各自のテーマを深め、それらをもちよってレポートを行う会形式をとることに、決まりました。近ずいてきた夏季休業中を各自の形修期間として、秋に入ってからレポートを討議し合うことにした訳ですが、討議の中心をつくる意味で、主なレポーター（草名氏—近代契約思想についてのレポート—豊島高校）を決め、その日の集まりを終えました。

9月3日、第一回の分科会例会は城南高校で行なわれました。城南高校は六本木の住宅街と繁華街のいりくんだ所にあり、二十数年を経た比較的

落ち着いた校舎で、その日は休みあけの試験が早く終わった為か、中はヒツリとして、校庭の隅の巨大な柳の木が暑い陽ざしを受けていました。この日は、レポーターの草名氏が所用で来られなかったことやその他の予想にたがうことがあって、会場校の佐藤勲氏と世話人二人が出席しましたが、多少の意見交換をした程度で、会を開きえず、流会になりました。これが一回目の分科会の集まりです。

11月5日、第二回目の分科会例会は東高校で開きました。私事で恐縮ですが、自分の学校を三時頃出て、東京を横断して西の端から東のはずれ工業地帯の東高に周り道をして着いた時は五時半で、秋の日も落ち、あまつさえ暗闇に雨が降っていたのを覚えています。この日は、井川氏(東)、中島氏(練馬)と世話人二人の四人で会をもちました。会は前回不都合で来られなかった草名氏にもう一度レポーターをお願いしてはじめる予定でしたが、折り悪しく風邪をひかれて欠席、かわりにいただいてきたプリントを中心にして会をはじめました。しかし何分御本人がおいでにならなかった為、討議が尽せず、結局それらは各自がもち帰って検討することになりました。これがはじめの三十分位。次に草名氏のプリントに端を発して、各自の授業内容について話を進めました。例えば、「二～三学期にわたりグループ発表の形式で現代に至るまでの思想家を扱い、それなりに成果を得ているが、思想の事前の調べは「人と思想シリーズ」(清水書院)を出ない」(井川氏)、「同じくグループ発表で授業を進めているが、今年は現代の思想家五人を選んだ、グループ発表形式は学習が必ずしもグループ全員に浸透しない憾みがあり、思想の高度さも問題を生んでいる。」(中島氏)等を中心に話しました。これらを、一時間半位話し会を終えました。そしてこれが分科会の最後の会になりました。以上が本年度一年間の本分科会の経過です。全体として、相互の討議で得る所も少なくなかったと信じてますが、テーマのレポート化の目標が実現し得ず、残念に思います。

# 倫社の基本概念をあらためて考える授業展開

都立豊島高校 葦名 次夫

## 1. はじめに(ねらい)

(1) 「どうも字〔倫社の用語〕というものは不思議だよ。……なぜって、いくらやさしい字〔倫社の用語〕でも、こりゃ変だと思って疑ぐり出すと分らなくなる。このあいだも今日の今の字で大変迷った。紙の上へちゃんと書いてみて、じっと眺めていると、何だか違ったような気がする。しまいは見れば見るほど今らしくなくなっている。——お前そんな事を経験したことないかい」……

上の文章は、夏目漱石の『門』の一節である。文中の「字」を〔倫社の用語〕と置きかえてみると、倫社の授業で私がしばしば直面する当惑を、よく示している。すなわち、仁・無常、無知の知、アガベなどの重要なことばをはじめとして、やさしそうでわかっているつもりの教科書の文章さえ、「こりゃ変だと思って疑ぐりだすと分らなくなり、じっと眺めている」と自分が理解しているつもりで説明したことが、何かとてつもなく見当違いのように思えて不安になるからである。

(2) もう何年か前のことであるが、かつて倫社のルソー授業の中で、こんなことがあった。生徒が → 「先生、自然に帰れて、野山で日なたぼっこすることですか」と質問してきたのである。ところが、さて、「自然に帰る」という一見わかりきったようなことばも、いざ説明してみようとすると、しんきろうを追うように、また、たまねぎの皮をむくようにとらえどころがなかった。そこで生徒に、また、「ルソーが自然であると考えていることを、できるだけ具体的な例をあげてくる。」宿題を課し、私もさまざまな自然について必死に考えてみた。そして次の時間に授業で展開

して、まとめてみたものが〔Ⅲ参考ルソーの自然について〕である。わかっていると思いきや、あらためていろいろな角度から考えていくことの大切さに気がついたのも、この経験がきっかけであり、生徒もものってきて思い出深い授業である。

(3) さて、そのようなこともあり、本年度のテーマである「生徒の意欲を高める授業」を、自分なりに今まで次のような形で展開してきた。すなわち、思想家の原体験やそのめざしているものが少しでも感得できればと願う生徒が意欲を高めいきいきのってくるようなおもしろい素材（具体例や比喩、エピソード）をつくりだすよう努めてきた。そして、その試みとして「きめ細かなねらいと具体例をもとに、よき問いかけと予習課題プリントを活用した授業」を展開してみた。その詳しい内容は、都倫研紀要第17集、高島高校紀要第3集、第一法規刊『高校・ホームルール指導事例集第10集』に述べたので、ここでは重複をさけ、それをもとに「わかっているつもりで倫社の用語を、いろいろな角度からあらためていく」ことに力点を置いた本年度の授業について述べることにする。

Ⅲ 以下の内容は、3時間のルソーの授業のうち、概説的な1時間の授業のあとに、テーマを絞り、具体的な事例をもとに、その意味について考察したものである。中心的なねらいとして、教科書の文章や用語を、身近な具体例を通して深めていくことに、特に留意した。

## Ⅱ 授業の展開

ルソーの社会思想の特色は、その理想的性格にある。彼は、人民の自発的な参加をもとにした社会形成の理論を構成し、私なるものと公けなるものが統合される共同関係としての自由を探究した。そして自律と自治の担い手たる主体的な人間そのものをつくりだす社会をめざしたのである。

上記の文章の下線部の内容をテーマとして設定し、以下展開することとした。

### (1) 理念的性格とは？

ルソーの思想について、その「理念的な性格」を「力は権利を生みださない」「人は正当な権力にしか従う義務はない」「社会契約は、人間の資格や本性を害するものであってはならない」ということばを手がかりに考えてみることにした。

①「力は権利を生みださない」具体例として、「ピストルをつきつけて奴隷とする契約書にサインしても、私たちはそれを無効と考える。その判断の根拠は？」と問いかけ、既製事実はそのまま権利とならないことを示した。②次に、正当な権力の事例として、「暴力団が、銃によって強制的に監禁することと、警察官が銃を使用して留置場に勾留することとは、どう違うのか」と問い、支配の正当性の考え方を紹介し、合意にもとづく合法的な権力の行使について考察した。③さらに、「社会契約は、人間の資格や本性を害するものであってはならない」という内容を「多数決で決めてはいけないことは？」と問い、「クラスの4人が他の1人をなぐっていじめてもいいと決議することは許されない」という事例について考えた。④そして、「してはならない。許してはならない」という判断の根拠には、是非善悪という正しさの観念(理念)があること、そして、そのような正しさの観念なしに社会がなりたたないことを指摘した。

生徒には、事実問題と権利問題の違いが難しかったようである。そこで、人を殺した場合でも、それが保険金めあての謀殺か、正当防衛や過失傷害致死の場合かでは意味が異なること、すなわち、その動機や状況を考慮してそれにふさわしい取りあつかい方を考慮し判断する必要があること、そして、その判断の基準が理念ではなかろうかと、補足的に説明した。特に「すでにそうになっている現実だからしょうがない」という考え方を批判し、克服していくところに、理念的性格の意義があることを強調した。

## (2) 社会形成の理論とは？

ルソーの「社会契約論」は、人民の自由な意志にもとづいて社会を形成する理論であり、またそこに近代の特色がみられる。

この「社会形成の理論」という内容を、次の角度から考えてみた。

① まず、社会は自然にあるものではなく、人間が目的を設定してつくりだすしくみであるという形で「つくりものとしての制度(フィクション)」という考え方を紹介した。導入として、「今、何千万という青少年が、建物の中で静かに(?)机にむかっている。また、はさ、通勤通学で何千万という人が、時間にまにあうよう急いでいた。一体、そうさせている力は何か」と問いかけた。そして、一人一人自由な意志をもっている人間の行動が織りあわされて、一定の型としての制度が成立していること、逆に、一人一人の人間の意識や行動が変われば社会制度が変わることを指摘した。すなわち、その説明事例として「皆が大学受験に意味を見出さなければ、〇社もS予備校も共通一次試験も×大学も一挙になくなるのではないか」と問い、受験制度は自然の山河のように実体としてあるものでなく、人間の意思と行動にもとづいているので本来は目的に応じてつくりかえることができることを示した。その他に「男女の違いは本来のものだから、男は仕事で女は家庭は自然で当然だ」という考え方と「男女の役割の違いは歴史的に形成されたもので変える」という考え方を対比させながら考察した。

② 次に、個人と国家のかかわり方を事例として考察した。すなわち、「日本人であることを自然的な事実として自明とする」考え方と、「私は、選択によって日本人となり、日本人であることをやめる」というあり方を対比させ考えた。そして、属地主義(アメリカで生まれた子どもは親の国籍にかかわらず、アメリカ人としてあつかわれる)をとる多民族国家アメリカを例として、民族と国家の関係について説明した。そして、ルソー

にとって、国民は自然的に存在するものでなく、自覚によってみずから形成されるものであることを示唆した。

③ まとめとして、社会契約論の近代的性格と意義について、「伝統や習慣というすでにできあがった現実を断ち切り、主体的に目的に照らしてつくりかえる『作為的な性格』」を指摘し、事例としては「決まる会義・決める会議」などの例をもとに考えてみた。そして、その根底に「自発的な参加」がなければならないことを指摘して、次のテーマへの導入とした。

以上、「つくりものとしての制度」「であることとすること（自然と作為）」「決めることと決まること」などは、生徒が特に興味を示すテーマであり具体例も多くあがり、社会科学の発想を身につけるよい素材と思われる。

なお、内田義彦『社会認識の歩み』丸山真男『日本の思想』（第Ⅳ）を参考文献として名著のコメントを付し少しでも読んでみたいという気をおこさせるよう努めてみた。

### （3） 自発的な参加とは？

① 自発的ということ。「いやいやではなくみずから喜んで進んですることの意味から考えることとし、「漫画をみることやインベーダーゲームも課題として強制されれば、とたんに嫌いな重荷となるのでは？」と問いかけ、「必修クラブと部活動の活気の違い、「自分の学校だ・自分が選んだ」という意識が希薄な学校群制度の問題点などの事例をもとに考察した。そして、ルソーにとって、「私たちのクラスやクラブだ」という自覚にもとづいて一体感や連帯感あふるる集団や社会を形成していくことが課題であったことを指摘した。

② 次に、「参加」の意味を、take partの和訳から問いかけ、「真剣に自分のこととして関り、責任をとる」という主体的な意味合いを強調した。具体的事例としては、株を買い賭けることによって、いやでも社会

事象や国際状況に興味や関心を持つこと、団体の役員や責任者になれば周囲への心配りの度合いが変わり、真剣になることをあげてみた。

③ そして、「参加」の一形態として、「契約約束・同意・合意・誓約」の意味を考察した。そして、決定的瞬間における約束や契約が大きな重みをもって社会を構成する要因となることを指摘し、社会契約の意義に触れた。

④ 以上の「参加」の意味をふまえて、次に、近代国家を形成するためには、人民の自発的な参加のエネルギーを前提としなければならないこと、また、そのような政治参加の主体をどう形成するかが大きな課題であったことを示した。事例としては、会津藩の民衆が藩の運命に無関心であったことを知って危機感をいだいた板垣退助が自由民権運動を始めたこと、などを話してみた。

⑤ まとめとして、「支配され命令され服従することに慣れ、他の人がやってくれるだろうと甘えて依存する」ところに自由はないことを強調し、ルソーの自由観をとりあげることにした。

#### (4) 共同関係としての自由とは？

全ての人と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前同様に自由であり、自己を全ての人と与えて、しかも誰にも自己を与えない——ルソーは、このような連帯感あふるる透明な共同関係に真の自由を見出した。

① まず、ルソーの自由に対する発想の基盤となるものを、スタロパンスキーの指摘する「直接的・無媒介的な透明な関係の自由」という角度から考察することとし、スポーツの応援や文化祭における一体感や、国木田独歩の『号外』にみられる危機に際しての連帯感などその陶酔と融合の意

識のあり方をまずとりあげてみた。

② 次に、「共同の交流の中にこそ、自由と幸福がある」というルソーのことばを、「共に喜びをわかちあい『共感』したい」という人間のあり方に焦って考察した。具体例として、一人の食事の味気なさを、うちとけた仲間との遊びや旅ののびやかさ、映画や本の感動を人に語りわかちあいたいという欲求などをあげた。そして、「ほっといてくれ。干渉されずに静かに読書を楽しみたい」というあり方と、「他の人と一緒に何か協力する中に喜びを感じる」あり方を対比させた。

③ しかし、共同関係の自由を求めながら現実の世界ではなかなか求めえない。そこで古くは「新しき村」の試み、新しくは、「山岸会」やさまざまなコミュニケーションを模索する動きを紹介しながら、「あいつは怠けて働かないのにたくさん食べる」という意識がある限り、真の協同も連帯も難しいことを指摘した。しかし、赤ちゃんに惜しみなく愛を注ぐ母親のように、人の喜びが自分の喜びとなるような豊かな「相乗関係」は望めないのだろうかと問いかけ、真木悠介氏の『気流の鳴る音』の世界を紹介した。そして「隣りの貧乏は鴨の味」など、自分の得は他人の損という現実の社会の「相克関係」と対比させた。そして、「人々が相互に引き離され、暗いしりの孤独の中に閉じこもる劇場」のイメージに対し、ルソーは、「全ての人がこの上なく親密に陽気にふざけ信じあい、暗れやかな面持の中に一切が一つに融けあう祭」をモデルとした社会を希求していることに触れ、次に公と私とが統合され、一般意志の実現される社会のあり方へと展開することとした。

この内容は、生徒の関心の強いものであり、また、マルクスの思想とも関連するテーマであるが抽象度が高いテーマのせいかな具体例と必ずしもうまくかみあっていず、その意味でわかりにくかった面があるようだ。

## (5) 公なるものと私なるものとの統合とは？

次に、一般意志の社会における公と私の関係について考察することとした。

① まず、「公共」の考え方をとりあげ、導入として、「高山植物の一本ぐらい失敬しても、カンの一つぐらい捨てても、と毎年300万の観光客が考えれば、上高地の自然は消滅してしまうのでは？」と問いかけ、公共の共通の利益という考え方に着目させた。次に、「私と公の対立」について、身近なカンニングやキセルの問題をとりあげ、次に、買い占めや土地ころがしという反社会的行為を指摘し、ゴミ工場、鉄道・学校(?)のように皆が必要と考えながら、しかし私の家のそばはいやだという矛盾したあり方について考えてみた。

② そして、それをふまえ、圧力団体と国民代表の考え方の違いや関というあり方をもとに、全体意志と一般意志を対比しようとしてみたが、適切な事例が浮かびにくかった。そこで、ややレベルは違うが、「クラスだけでなく学年や学級全体のことを考える」というように、個人の特定の立場と集団の全体の立場とを対比して展開しようとしてみたが、盛りあがらず、「公と私」の内容は、簡単なようでいてなかなか難しかった。

③ そこで、「公共の精神をめざし自己を形成し変えていく」という内容について考えることとした。すなわち「自由と強制・権利と義務が対立せず一体となるようなケースはあるだろうか」と問いかけ、理想的なクラブでの早朝特訓の申しあわせやそうじが好きで生きがいだ(!)という生徒の例をあげてみた。逆に、一体感や連帯感が希薄でバラバラな集団や社会では、私と公の矛盾が大きくなることを示し(「L・H・Rや生徒総会より予備校へ!」)公共の観念なしに社会は形成されないことを指摘した。そして、ルソーは、この公共の利益という一般意志の問題を真正面からとりあげた思想家であり、その問題は「市民社会の担い手をいかに形成するか」という人間教育や人間変革の理論へと発展せざるをえないことを、『エミール』の内容を紹介しつつ示唆した。そして、「公と私」の関係はあらゆる集団

に存在する基本的な問題であるとし、補足的に、一方では「公」が全体主義として「私」を圧迫してはならぬことを戦前日本の個人と国家の関係をもとに説明してみた。

## (6) 自律にもとづく人間と社会とは？

今までの内容のしめくりとして最後に、「みずからルールを定め、みずから自発的に従う自律と自治」のありかたをねらいとして、展開した。

① まず導入として、禁酒・禁煙や早朝学習とジョギングの実行の例をもとに「みずからに規律を課すことを決意し実行するという自由」の考え方を、紹介した。そして、その個人が自律すること、人民みずから参加して法を定めそれを守るという自治のあり方が、同じ構造をもっていることを指摘した。

② 次に、「ルールをつくらうというルール」、すなわち、ルールをつくって守っていかうとする意志に支えられてはじめて社会が形成されていることを、スポーツのルールや入試規則の例をもとに考察した。また、ルールのある「制度としての決闘」と、ルールが全くない「万人の万人に対する戦い」の無法状態との違いを指摘した。「権利の全面的な譲渡にもとづく一般意志の形成」の内容を、この根本契約としてのルールという角度からとりあげてみることも効果的なようだ。

③ 以上をふまえて、「共通の意志によって形成されたルールに従うことが自由である」という内容を、法の支配との関連させ、次の三点にもとづいて考察した。すなわち、みずから決定したことにみずから従うという積極的自由の考え方、交通法規や信号にみられるように明確な基準が設定されることによって予測可能性が高まり安定した秩序が形成されること、網吉の生類憐みの令にみられるような恣意的な人の支配との対比を通して展開した。

④ そして、ルールを人民の参加と意志にもとづいて不断に形成してい

くことが、ルソーの直接民主制の原イメージではないかと問いかけ、自由や権利、さらには民主主義もすでにあるものでなく、人々の日々の意志と行動にかかわっているということを、丸山真男氏『であることとすること』の文章を引用して説明した。

⑤ さらに、そのような民主主義を担う主体の形成がルソーの課題であったこと、そのために「公共の意思に従うべく自己を形成していく自己教育と自己変革の論理」が含まれていることをあらためて指摘した。そして「自由であるように強制する」例として、子供を自立させるためにあえて突き離す母親や、アル中患者を社会復帰させるために指導・努力する医師などの例をあげた。そして、この「自律」に人格の尊厳を求めた思想家にカントがいることを示し、次の授業で取りあつかうこととした。

### Ⅲ 【参考 ルソーの自然について】

自然ということばには、どのような意味あいがあるだろうか。ルソーの思想と関連させながら考えてみる。

① まず、生命の根源としての自然が考えられる。逆光にきらめく若葉や柔かい土の感触など、なまの自然との透明でじかのふれあいの喜びは、『告白』によく描かれている。

② 次に、「自然が命じている事物の理に即して従うこと」が考えられる。「子は作るものではなく、さずかるものなのだから遺伝子の操作によって男女を生みわけることは不自然だ」「薬は人工的につくられた毒であるとする漢方」などの考え方がそれにあたる。それはまた、運命や宿命と考えられる必然性に従う、という『孤独な散歩者の夢想』の発想とも関連する。すなわち、病気を完全になおさねばという闘病に對し不十分ながらなじみつつ生きる従病という発想である。このようにルソーにとって、「個性に即すことが自由」であり、自然なのである。

③ ルソーにとって自然な生活とは「単純・素朴に必要な最小限のもので生きる」ことである。「文明は人間を虚弱にし墮落させる」と『学問・芸術論』で主張するルソーにとって、車やルーム・クーラ「なしですます」生活が自然なのであろう。また「不幸はもたないことにあるのではなく、不足を感じさせる欲望にある」としたルソーの考え方は、老荘の少欲知足や、仏教の「吾、唯、足ることを知れり」とする精神に通ずるものがある。いわば「欲望の充足を幸福」とする文明社会への批判が、そこにかがわれる。

④ 「直接的なありのままの率直さ」が、人間の自然なあり方として考えられている。そのことは「自然のままに真実においてみせてやりたい」とし、自らの欠点を率直にさらけだしてすべてを描きだそうとした『告白』によくかがわれるところである。

⑤ それはまた、「ぎこちなくこわばってわざとらしくこだわる」人為や作作的な意識を否定する考え方となろう。スタロバンスサーはその著、『透明と障害』の中で、自他の率直な交流を妨げる障害をすべて透明化することを希求した思想家として、ルソーをとらえている。

ルソーの「自然に帰れ」や「自然状態」は、このような自然の考え方にもとづいているといえようか。

#### IV ま と め

以下「わかっているつもり」の倫社の用語を、あらためて考えていく授業を通して気づいたことを、述べてみた。

第一に、授業の方法であるが、具体例を用いた授業は冗長となりやすい。生徒の知的理解に応じて、具体例を必要最小限に焦ったほうがひきまるといえる。また、発問の工夫が特に大切である。時間をもたないとしてつい発問を急いでしまうことが多いが生徒のリズムにあわせていかないと

効果が弱い。反省させられる点である。また、「具体例創作テスト」を適宜実施してよいものを読みあげることも、動機づけの上から必要に思った。また、具体例の多用は、ねらいがほけやすいので、要点を図式化して板書やプリントにしておき、「今、何をポイントとして考えているのか」をはっきりさせたい。また、どの具体例に興味と関心を示したか、おおよそ生徒の顔を見ているとわかるが、こちらでは意外な事例が印象に残っていることもあるようである。具体例の是非をフィード・バックできる方法を見出すことも今後の課題である。また、話し方については時に結論やまとめを示さず、思考を誘い出すように未知なる空白の部分をつくる工夫も必要である。同じことをしゃべっているつもりでも、ちょっとした間や抑揚、強調点の違いで反応が随分異なってくる。また、あらかじめ定められた棒読みでなく、こちらがのって一つのリズムをつくるのが、テープレコーダーを聞いてみて、つくづく大切だと思う。「話し方」をさらに工夫していきたい。

第二に、具体例を用いていろいろな角度から考えていく授業のよい点は、新しい発見があることだ。具体的に考えることにより、思想家やその用語の新たな面に気がついたり、理解していると思っている事項やポイントが意外にあやふやだったりする。具体的な事例を通して考察することが自己の理解度の確かさ、深さをためすいわば試金石といえる。また、具体的な事例を話している中で、その思想のねらいや重要なポイントに気がつくこともある。そして、より適切な具体例も浮かぶのも、実際の授業で話している際に多い。

だが一方では、あまりに身近かな具体例の中でくだきすぎると、密度の低い表面的で平板な内容となりやすい。また、自分で何をねらいとしているのか宙に迷うこともある。客観的で抽象的な内容をち密な形でどうかみあわしていくかが、大きな今後の課題である。

# 中井正一と「美学入門」について ——「芸術と人生」の試み——

玉川学園高等部 新井 徹夫

## 1. ねらい

われわれ教育現場にとって、80年代は「試練と思索」の時代であるといわれる。いわゆる「受験過熱」「学校格差」「基礎学力の低下」「落ちこぼれ」といった言葉で象徴されるわが国の教育の歪が、これまで最も端的な形で高校教育に現われてきている。現代社会における人間の「疎外状況」が深刻に進行する中で、高校がすべての生徒たちにとって明るく、生き生きとした生活の場となるためには、われわれ教師の主体的な取り組みをおいて他にない。その一方、「真の幸福とは何か」「いかに生きることがよりよく生きることなのか」を自ら問う高校生の「生き方」が重要になる。青春時代を生きる彼らが「青年期を失う者は、人生をも失う」ことを自覚する意義は大きい。それゆえ、「倫理・社会」の学習にあっては、高校生に感動を与えることが肝要であろう。

都倫研、第三分科会「近・現代の思想」で研究テーマの一例として挙げた「芸術と人生」について考えるとき、「生徒の意欲を高め」「感動の教育」を希求するさまざまな試みや多様な教材の発掘が要請されてくる。

たとえば、思想家の生きた時代や社会の背景、生活環境との結びつきを考え、思想そのものもつ永遠の生命を汲み取る努力などである。さらに、生徒の身近にある文学、美術、音楽等の芸術作品を素材として「美とは何か」「芸術とは何か」「人間とは何か」を探求させたい。ここでは、生徒一人ひとりの美的感受性を尊重しつつ、情操を豊かにするとともに、芸術的な能力を伸ばし、創造性に富む個性豊かな人間の形成を志向したい。また芸術の学習を通して、美的感覚を洗練し、個人生活や社会生活を明るくする実践的な態度や能力を培い人生観・世界観の確立の一助としたい。

## 2. 展 開

### (1) 美を通して人間を語る—— 中井正一の生涯

「美によって世界を観るという点で、日本美学史は中井正一から始まる」といわれる。中井は1900年広島県に生まれた。緒方正清執刀によるわが国最初の帝王切開で生まれた。第三高等学校から京都帝大文学部哲学科に入学、深田康算に師事し美学を専攻。25年卒業、卒論は「カント第三批判研究」。大学院に進学、『哲学研究』の編集にたずさわる。この頃カント学派からコーヘン、E・カッシーラーを経てハイデッカーを考究する。

29年、恩師深田康算の死に際し『深田康算全集』全4巻の編集にうちこむ。そのなかで中井を中心とした美学者の若いグループがつくられる。中井のほか富岡益五郎、長廣敏雄、徳永郁介、藤井源一、藤田貞次らである。そこで「美学・芸術学・芸術史の理論的研究専門誌」の発刊が企画され、30年、『美・批評』を創刊する。その直後に辻部政太郎も参加している。34年10月に終刊。1933年、京大事件に際し、久野収ら学生とともに弾圧反対運動に立上った。それ以後、反ファシズム文化運動をおこなっていた新村猛、真下信一、久野収ら美学以外のメンバーを入れて、35年再刊、『世界文化』と改題。36年、週刊紙『土曜日』発刊。

37年、治安維持法違反で検挙される。懲役2年、執行猶予2年の宣告を受ける。そのため京都大学講師の職を失う。このとき、九鬼周造は「教え子のとらわれてなき家訪えば比叡の山は冬空にすむ」と歌っている。

44年尾道へ疎開し、翌45年尾道市立図書館長となる。ここでカント講座、論理学講座を受けもち、文化啓蒙運動に尽力する。46年広島地方労働委員長となり、また文化大学夏季講座を開催。47年、民主戦線より推され、広島県知事に立候補。同年、『近代美学の研究』（三一書房）出版。48年、国立国会図書館初代副館長、初代図書館協会理事長となり図書館法成立に力を尽した。52年5月、52歳をもって胃ガンのため没した。国会図書館の理念を実現する激務が「そのすぐれた心身を削り、まさ

に生涯を大成する年代の入口で、その生命を奪った」のである。

『美学入門』は、その直前の51年7月河出書房から刊行、『日本の美』（『NHK教養大学』宝文館）は死後3ヶ月の52年8月出版された。後者は、生前NHKで教養講座として講演したものである。

(2) 『美学入門』（朝日選書）をテキストにして

「芸術と人生」の教材選択にあたって、すべての生徒が共通して容易に得られる最も身近な素材は「現代国語」のそれである。夏目漱石『こころ』中島敦『山月記』などの小説、詩歌、評論などの文学作品である。

<問題解決の方法>

「倫理・社会」

|| = <読解力> {

「現代国語」

<構成と表現>

- ①問題意識
- ②原典資料の理論的・系統的把握
- ③人間生活の諸事象の相互連関的把握
- ④自主的・批判的な考え方
- ⑤論理的な思考方法  
(対象・立場・方法の明確化)
- ⑥論理的な文章の構成

ここで、中島敦『山月記』  
にテーマを求めてみたい。

彼は近代英文学・中国古典  
に親しみ、孤独の中に人間存  
在の疑惑とたたかう自己を、  
明晰な人間把握の方法、確実  
な表現力、豊かな想像力とに  
よって作品化して、注目され  
ながら持病の喘息のため33  
歳の短い一生を終えた。虎に  
なった李徴は中島敦の分身と  
も解し得る。人間を虎に変身  
させたモチーフを中井正一『  
美学入門』（朝日選書32・

朝日新聞社）によって探求する。そこを起点として、生徒個々の問題にア  
プローチする方法である。このとき、生徒の読書量及びその読解力に大き  
く左右される。そこで、「倫理・社会」と「現代国語」の壁を除去し、両  
者で相互に読解力を身につけさせ、考究し得たものを小論文にまとめさせ  
る。それというのも、生徒にとって「理解できた」ということは「表現し

得て初めて理解できた」といえるからである。その基本的な考え方、プロセスを試みに図式化してみたのが前ページの図である。これはまた、小論文の内容を評価する際のチェック・ポイントでもある。

ところでなぜ教材の底本として中井美学に注目したか。現代の高校生の興味関心は多種多様である。芸術をとっても、文学のみならず美術、音楽、演劇、映画とそのジャンルも実に多岐にわたっている。こうした傾向の中で、一つの典型教材だけで「芸術と人生」について考察するのは困難である。そこで、芸術のあらゆるジャンルを網羅し、基本的原理的な学習を可能にするテキストが望まれたからである。中井正一『美学入門』は、およそ30年近くも前に出版されたものである。それにもかかわらず、哲学・美学論文からの引用などほとんどなく高校生でも容易に読める。そればかりでなく、「美とは何であるか」から平易な言葉で説き、「機械時代のぞんで」という将来への展望をきり開こうとする終章まで、どの章をとっても、今日なお、美や芸術を語る有力な手がかりとなるからである。

### 3. ま と め

指導上の留意点；VTR、スライド、テープ、レコードの使用を積極的に行なう。学習形態は講義、ディスカッション、アンケート、小論文等を織りまぜて進めていく。この学習の特質上、最も大事にしたいのは、生徒の豊かな美的感受性の養成であり、その伸長によって、諸作品の新鮮な解釈を試みることである。また、他教科、とりわけ国語科、美術科、音楽科および学校行事との関連性に留意する。さらに補助教材として「日曜美術館」(NHK)、「美をもとめて」(TBS)、「美術散歩」(テレビ朝日)などの視聴、スクラップ・ブック作成などが学習意欲をたかめる。

見る者に強い感動を与える民族の文化遺産をどう継承し、発展させるかを臨地見学の中で考究させたい。日本の美、情緒、誇り、生命力といったものから自分のイメージを創り出し、いろいろな言葉で自己表現を試みさせたい。この自己表出こそ創造的活動の大切なひとつなのである。

# 近代日本の思想 <大正デモクラシー>

## 吉野作造 — 民本主義 —

都立東高等学校 井川 哲夫

### 1. はじめに

日本における近代思想の学習内容をあげると、啓蒙思想、自由民権運動、国家主義、国粹主義、社会主義、キリスト教思想、大正デモクラシー、個人意識と自我の追求が主な事項である。ここでは大正デモクラシーの思想形成に重要な意義をもつ吉野作造の思想と行動を中心に考察したい。

大正デモクラシーの運動は明治憲法の下における天皇主権主義という政治状況のもとで発展し、天皇の権力をできるだけ制限し、個人の尊重、国民の憲政を説き、普通選挙運動、政党内閣確立、貴族院改革などが主なものであった。これらはデモクラシーの主張であったが、主権在民の国民政治を主張するものではなかった。天皇制と民主政治を調和させざるをえなかったからである。民本主義は基本的にこのような立場をとっているがこのことは、欧米的デモクラシーのわが国の導入であり、民衆の政治的要求の組織的運動でもある。天皇主権の基本にたつて、政権の運用面で民意を最大限に尊重しようとするものであり、イギリスの議院内閣制を意図したこと、わが国民民主政治の発達に大きな意味をもつ歴史的発展である。

### 2. 憲政の精神的根底 民本主義の内容

吉野は民本主義について「民本主義という文字は、日本語としては極めて新しい用例である。従来は民主主義という語を似て普通に唱へられていたようだ。時としては又民衆主義とか平民主義とか呼ばれたこともある。然し民主主義といえは、社会民主党などという場合におけるが如く、国家の主権は人民にあり、という学説と混同されやすい。又平民主義といえは、平民と貴族とを対立せしめ、貴族を敵にして平民に味方するの意味に誤解せらるるの恐れがある。ひとり民衆主義の文字だけは、以上の如き欠点は

ないけれども、民衆を重んずるという意味があらわれない嫌がある。我々がみてもって憲政の根底となすところのものは、政治上、一般民衆を重んじ、その間に貴賤上下の別を立てず、しかも団体の君主制たると共和制たると問わず、あまねく通用するところの主義たるがゆえに、民本主義という比較的新しい用語がいちばん適當であるかと思う。】(「民主主義論集」)

吉野の説くデモクラシーの概念の中には民主主義と民本主義との二つの場合が含まれるとし、第一に「国家の主権は法理上人民にあり」とするものを民主主義とし、第二に「国家の活動の基本目標は政治上人民にあるべし」という意味に用いられる。この第二の意味に用いられるときに、われわれは民本主義と訳するとしている。従って天皇主権主義である明治憲法下の日本では民主主義は通用しないから、第二の民本主義をとり、そこでは法理上の主権の存在いかんは問題とせず、ただ主権を運用するに当っては、一般民衆の利益、幸福、意志に重点をおくことを政権運用上の方針とした。この民本主義の定義を基礎に二つの内容をあげ、一つは政権運用の目的すなわち「政治の目的」が一般民衆の利福にあるということ、他は政権運用の方針の決定すなわち「政策の決定」が一般民衆の意向によるということである。

① 政治の目的— 政権運用の終局の目的は一般民衆の利福にあるべきだということ

② 政策の決定— 政権運用の終局の決定を一般民衆の意志におくべきだということ

①は「人民のための政治」(for the people)であり、②は「人民による政治」(by the people)である。この政権運用における一般民衆の意志を尊重する理論上の根拠は、何が民衆の利益であるかは人民自身が最もよく判断することができるということでありその後の政治論の中心となるものである。このような基本的な考えの具体的なあらわれは、普通選挙論や代議政治論などに展開されていった。

民本主義は政治の目的を一般人民の利福におくのみならず、政策の決定についても、一般人民の意向を終局的には重要視するものでなければならぬとし次のように書いている。「政策の終局的決定を人民の意向によらしむべしとする主張の理論上の根拠は、おそらく何が人民一般の利福なるかは人民彼自身がもっともよくこれを判断し得るということにあるのであろう。政治にして人民一般の利福を目的とする以上、その運用はすべからず何がいわゆる人民一般の利福なりやをもっともよく知れるものがこれに当るを必用とする。しかして自家の利福の何たるかはその本人がいちばんよくこれを知っているものであるから、近代の政治は、人民一般をして終局的にその方針を決定せしむることがもっともよくその目的に適合すると認めたのであろう。……人民一般の意向を重んずるの主義は、政治を適当ならしめ、公平ならしめまた清潔ならしむるの効用がある」とし人民一般の意志を尊重する基本的精神が民本主義の根本理念を形成しているように考える。

### 3. デモクラシーとキリスト教

民本主義の思想を形成した精神的基礎はなんであったのか。彼は誠実なキリスト教信者であった。高校在学中仙台で米国婦人宣教師、アンネー・サイレーナ、ブゼルのバイブル・クラスに出席する。明治31年(1898)20歳の時、教会牧師中島力三郎から洗礼を受ける。東京に来てからは海老名弾正の本郷教会の会員となり、海老名の自由主義的神学における思想的影響を多く受けることにより、キリスト教的ヒューマニズムを特色とする人間観や世界観がデモクラシーの基礎となり、人道主義や人格主義を基調とするようになった。この人格主義はカント的意味の「人格主義」であり、個人を目的価値としてこれに絶対的尊厳を与えるものである。個人の人格の尊厳「人格主義」がデモクラシーの本質であり、民本主義もここにありとする。そして民本主義の実現のためには人格主義が人類に生きた信念として働いていなければならないとし、キリスト教の信仰が人類に根づかな

くはならないと考えた。吉野はデモクラシーとキリスト教の関係について『新人』で次のように述べている。「デモクラシーの依って立つところの理論的根拠は何かと言えば、人格主義である。従って、デモクラシーを徹底的に実現せしめんがためには、人格主義の理論に密接なる根底を置かねばならぬ。デモクラシーが徹底的に社会の各方面に実現するためには人格主義が人類の間に生きた信念として働いていることを必要とする。…

理論はもとよりかかる信念の活動力を助けるには相違ない。然し活動力の本源はどこまでもこれを宗教的信仰に求めねばならない。しかして人格主義がその信仰の内容として一層著しく活躍しているものはわがキリスト教ではないか。われわれは全ての人類を神の子として全ての人類に一個の神聖を認め、固くキリスト教に結んでいる。これほど確実な人格主義の信念がまたと世にあらうか。故にキリスト教の信仰はそれ自身、社会の各方面に現われて直ちにデモクラシーとならざるを得ない訳である。（「デモクラシーと基督教」）

#### 4. ま と め

以上大正デモクラシーの代表的思想家である吉野作造「民本主義の内容」  
「デモクラシーとキリスト教」について述べた。指導上の留意点として「  
①日清・日露の両戦争から第一次世界大戦にかけて日本の資本主義は発展し帝国主義の段階に入り、また国際情勢の変化もあって国内の政治や思想に大きな影響を与えた歴史的背景に留意する。②政党政治の発達にともなう、民主主義の思想を中心に言論、思想活動が活発になったが、一方では「治安維持法」の制定により国家権力の激しい弾圧政策をうけることになったことに留意する。③キリスト教の人道主義的思想と社会主義思想の関連について留意する。」ことなどがあげられる。

# 「現代社会の特質」で用いる映画の話題の工夫

都立日野台高校開設事務所 菊地 堯

## 1. 現代社会の特質の具体的理解をめざして

現代社会のさまざまな特質は、単なる客観的事象として外在的にとらえるだけでは済まない。それは、何よりも現代の人間ひとりひとりの生活への外圧であったり、またひとりひとりの生活そのものの中に貫く共通課題であったりする。さらにひとりひとりの生き方、考え方に滲透して、あたかも先天的で内発的なわれわれ自身の思想的態度のように働きもする。

生徒に現代社会の特質を理解させるということは、以上のような視点をぬきにしてはできないように思う。自分に関係のない、遠いよその世界の問題ではなく、生徒自身の生き方にかかわる切実な問題であるということ十分に理解させるようにしたい。しかし、一方では生徒はまだ世の荒波に直接さらされているわけではなく、家庭や学校という防波堤によって、荒波の直撃からまもられているという面がある。このことは、現代社会を見るかれらの目がまだ十分には開かれない甘さや、現代社会の諸事象を自分に直接かかわる問題としてとらえ得ない無関心につながっている。

こうした生徒に向って、現代社会の諸特質の指導を展開する上で、映画の話題を用いるのは、展開上の工夫として、妥当なようである。（その意味については、後で述べることにする）以下、二つの例を報告して、今年度の研究参加の資を果させて頂きたいと思う。

## 2. モダンタイムズによる展開

いうまでもなく、チャップリンの名面である。旧作ながら生徒がテレビなどで見たことがある、親しみやすい素材であるので、どんな場面を覚えているか、興味をもったかを数人にいわせると、共通の話題にしやすい。

そして、これが1930年代に既に作られたという事実が、チャップリンの

現代社会への洞察の深さを物語るし、現代社会と人間の問題へのかれの危機感の切実さがわかるという指摘によって、単なるドタバタ喜劇ではないモダンタイムズの問題提起に気づかせる。

ここに描かれた時代は、フォード自動車工場で採用されたベルトコンベア・システムが企業の生産能率を飛躍的に高め、生産規模を大膨張させた今世紀前半の技術革新の一つのピークの時代である。それまでの任意な流れ作業が、自己の分業工程を完了したら次へ送るというものであったのに対し、ベルトコンベア・システムは、労働の自発性を完全に奪った強制的なものである。コンベアのスピードアップにより、資本家は労賃を増加させないで、より多くの労働を労働者に強いることができる。

チャップリンが自ら扮する、どじな労働者の滑稽な姿は、一企業内の特別な問題ではなく、機械に従属させられた現代の人間の悲惨な滑稽を示すものである。

労働者に食事をさせる能率的な機械（これが結局は故障で不採用になったことは僅かながら救いであるが）は、今日の日本での養鶏や養豚の実態を思い起される。家畜に対する人間の待遇は、そのまま人間の人間に対する待遇になりはしないか。そういう問題提起を含んでいる。スープを頭から浴せたり、とうもろこしが猛スピードで回転して、歯に当たった粒が散乱したりする。アクション・ギャグには止まらないものを考えさせたい。

労働者がサボるのを監視するテレビ装置。映画では壁面に大きく社長の姿が写し出され、チャップリンがどなられる。これはもはや、監視用TVとして日常化している。それだけに、もはやこれが奇想天外な喜劇でさえなくなって、われわれは書店やスーパーマーケットでTVカメラによってにらまれていることに慣らされてしまっている。しかし、これは本当に当然なことであろうか。労働者を働かせる・盗賊を防ぐという特定の目的には極めて効果的で能率的なこのシステムは、人間性とのかわりからみていかがなものであろうか。



ビューロクラシーと人間という角度から見ると、かれが死期の近いのを知り、自分を中心にした家庭の幸福に絶望したことによって、はじめて人間らしい生き方をつかんだという設定は、ビューロクラシーの余りに強い支配力を考えさせる。すべての現実の生活に絶望しなかったとしたら、かれの生き方は切りひらかれなかったということになる。それほどに、現実の社会の制度は、個人生活の基本的なあり方に浸透し、人びとは懸命に自分をそれに適合させようとして生きている。

青年である生徒は、何十年の間現実の社会生活に馴染んだ大人たちの生き方、考え方を変えにくいことを理解するのは、むずかしい。青年の眼から見て不合理と思われる制度や秩序も、それを考えるのは簡単ではないことを考えなければならない。しかし、その一方で、だからといって、現実盲目的に迎合するばかりでは、人類の生活の前進があり得ないことも事実である。その辺のこともおさえておきたい。

#### 4. 映画を素材とすることの意味

「生きる」の場合、特にはっきりわかることであるが、ここでは社会制度やその中で培われてきた人間の生き方が、具体的な人物の形象として描かれるところに、教材としてのよさがある。制度の問題を単にそれだけで抽象的に論じるのではなく、主人公の心の動きを通して、制度にかかわる個人の問題を、個人の側に立って考えることができる。このことは、文学作品や手記でも、すぐれた内容のものなら同じであるが、映画の場合、文字に平素親しまない生徒でも、主題にひきこみやすいという利点がある。

教師がそこで展開しようとする主題からははずれる側面への生徒の興味関心にも切り捨てることなく、かれらの自発的探求の芽を育てるようにしたい。たとえば「生きる」は、現代の家族、特に親子、夫婦の問題という角度からも、好個の素材となり得る面がある。主人公の葬儀に集まった人たちの断片的な話がまとまると、以上のストーリーが構成され、息子夫婦は初めて父の死の前の数ヶ月の生き方を知るのであろう。

# 授業展開の方法のための試案（その2）

## — 現代思想の位置づけをめぐって —

帝京高校 近藤 卓

### 1. はじめに

生徒は、聞いて納得できること、わかることには興味を示すものである。例えば教師自身の体験談や、高校生の頃の思い出話などには、ふだん半分眠っているような生徒も、目を輝かせて反応する。

わからないからつまらない、つまらないから聞きたくない、聞かないからなおわからない、という悪循環におちいっているのであって、その出発点はやはり、「わからない」ということではあるまいか。

倫理・社会という新しい教科目に接したとき、多くの生徒は一様に関心を示す。それが時間とともに、わからなくなっていく、あるいはわからなくさせていくのである。

「わかるはなし」に、どの程度、どのような要素を、どのような方法で付加し、授業を展開していくか、そこどころが特に倫理・社会の授業の難しい所であり、また、おもしろい点でもあろう。

### 2. なぜ現代思想か

なぜ現代思想を学ぶのか、またなぜ源流思想を学ぶのかという点を、まず納得させる必要がある。一学期には「現代とは何か」を問いかけ、この社会の状況を容観的に把握させる中から、とくに、人間疎外の問題を浮かび上がらせることをめざす。従って、ここでの至達点は次の表現に要約されよう。「現代の産業社会が、組織化・機械化という特徴においても、また、そのほかにも、さまざまな社会的ひずみを深刻化しつつあるという点においても、確かに人間性を疎外する状況にあるにせよ、ひたすらに疎外感からの解放を消費生活や感情的行動のうちに見つけようとするだけで

は問題の解決とはなりえない。これからの社会に生きる人間は、主体性の  
自覚にたって、自らの人間的価値を充実させると同時に、その価値をいか  
す組織を求め、育てていくことが必要なのではないだろうか。このような  
組織生活の充実があってこそ、大衆社会もその非生産的特徴を改めていく  
ことが期待できるのである。」(新訂倫理・社会、東京書籍、昭和51年、  
30頁傍点筆者)

ここには、「現代とは何か」を学習する際の、一つの到達点が表示されて  
いる、と同時に、すでに、現代思想を導入するための糸口が用意されてい  
る。ここを逃さず、直接、現代思想の学習へ結び付けることが、肝要であ  
ると思われる。具体的には、第三章「現代の思想的状況と課題」にすぐ入  
るのである。そこにあるように、「現代思想は、人間性がそこなわれている  
現実の矛盾や危機を克服しようとする共通の課題をになう」(前掲書、  
166頁)ということであるとすれば、これはまさに、第一章の学習成果に  
と直接に結びつくものであるまいか。

### 3. 年間授業計画

以上のように、現代の社会を批判的にとらえ、その問題点にきり込んで  
いくなれば、現代思想としては当然、社会主義と実存主義がクローズアッ  
プしてくる。つまり、「社会主義は、人間の社会的連帯性を重視し、人間  
性喪失の原因を近代の社会体制にあるとして、その変革をもって現代の課  
題に答えようとする。これに対して実存主義は、個人の内面的自覚による  
人間の主体性の確立、人間性の回復を主張する。」(前掲書、169頁)

次に、こうした現代思想のとらえ方をした上での年間学習指導計画の一  
例を示してみたい。

(時間数)

1. 現代と人間・現代とは何か……………8
  - 1) 産業社会化の諸問題……………5
  - 2) 大衆社会と情報化社会……………5

## 2. 現代の思想的状況と課題

1) 現代の思想的状況	2
2) 諸思想の対立	2
3) 社会主義	5
4) 実存主義	5
5) プラグマティズム	3

## 3. 人生の考え方と生き方

1) 思想の源流	1
2) ギリシアの思想	4
3) キリスト教	3
4) 仏教	3
5) 中国の思想	3

このように内容を精選し、一年間の授業の流れを明確に一本化する。ということが、わかる授業のための一つの方法ではないだろうか。こうした方法をとれば、おのずから一つの主題が設定されなければならないことになろう。それはつまり、現現代社会における疎外状況の克服ということである。このテーマを柱として、上にあげた精選された項目を学習する意味を明確にする。

## 4. 授業展開

実際に授業を展開していくに際して、次の各点に特に留意する。

- ① 現代社会の分析を通じて、問題意識を喚起する。
- ② 疎外状況・人間性喪失の現実を目を向けさせる。
- ③ こうした疎外状況を克服するための現代思想の意義の理解。
- ④ 源流思想・宗教の現代的意義の理解。
- ⑤ 近代思想を現代思想との関連から押える。

このうち第一点と第二点を充分つっこんで行なう必要がある。こうした

意識は、現実の高校生の生活からは、直接感じにくいものと思われるからである。従って、ここではなるべく身近な例（公害問題、受験競争、マス・コミュニケーション、官僚制等）を具体的にとり上げて、しらすらずのうち閉じ込められているこの疎外状況を、分析していく。これだけのことに、一学期の大半の時間が使われる。そのため、社会集団と人間関係や、青年と人間形成の項は一切省く。こうしておいて、第三点を一学期のしめくくりとしていく。

夏季休暇の課題として、第一学期に学習した内容に関連した書物を読ませ、論文を提出させる。この第一学期の授業展開がうまくいくことが、全体の流れを決定する。二学期は現代思想を具体的に展開することが中心となる。三学期は源流思想から近代へと流していくことになる。

## 5. おわりに

本稿は、昭和54年6月25日都立蒲田高校で行なわれた、都倫研第2回研究例会での、「年間学習指導計画における現代思想の位置づけ」と題する発表をもとに、まとめたものである。

この報告を行なう動機となった問題意識は次の数点にある。第一点は、倫理・社会の教科内容が盛りたくさんで多岐にわたっており、その結果、各章の橋渡しが不自然となりやすいということである。このことから量的な面でも無理を生じており、授業計画の際には、こうした質・量両面での検討が必要になる。これが第2点である。

さて、ともかくもこうした問題意識から出発した授業計画が、自分なりに納得し、定着しようとしていたところで、「現代社会」の出現である。倫社での経験を生かして、なんとか手掛けていかねばなるまい。

# 江戸時代の儒学の展開

## — 荻生徂徠を中心にして —

都立蒲田高校 徳久 寛

### 1. ねらい

江戸時代に展開した儒学の学派にはどのようなものがあり、それぞれどう違うのかを学習する中から、なぜ儒学が封建社会を支える思想として展開したのかを明らかにする。

特に、荻生徂徠にみられる古文辞の立場と政治的理論の立場とを結論として導くようにする。徂徠の立場が、儒学と封建社会との関連を説明する上で最もわかりやすく、また近代的な政治観、学問観を提示しているように思われるからである。

### 2. 展 開

#### (1) 中国の儒学の展開

江戸時代の儒学の展開を理解するために、まず中国の儒学の展開を時代の順に大きく3つのグループに分類し、説明を加えておく。日本儒学の展開（江戸時代）は、朱子学から古学、古文辞学へと推移したが、これは中国の儒学の歴史をより過去へとさかのぼっていったものである。このことをわかりやすくするために、まず中国儒学の展開を概観しておくことが生徒の理解を助けることになると思われるからである。

#### (1) 堯や舜の時代

中国最古の理想的君主の時代、伝説上の時代ではあるが、孔子自身が自分の模範としてあおいでいる時代。より詳しくは、堯、舜から、湯王、文王、武王、周公までを含めるが、煩雑になることを避け、堯と舜で代表させておくことで充分であろう。堯、舜の治績については、「書」の堯典、舜典にみられる話をしておく。

#### (2) 孔子や孟子の時代

春秋・戦国の混乱した時代に、高い理想をかかげ、思想を展開し、弟子の教育をおこした時代。孔子の思想は「論語」にみられ、その強調するところは仁の実現にある。孟子は性善説と王道政治の思想。孔子、孟子については、すでに源流思想のところで学んでいるので、生徒には復習のかたちになる。

### ① 朱子や王陽明の時代

中世になって、古代の孔子や孟子の思想を手がかりに、儒学思想を発展させ、理論づけがおこなわれた時代。いわゆる宋学のことであるが、孔子や孟子の時代に比べると、哲学的・形而上学的な性格が強く、「論語」のように具体的場面に即しての話がとほしく、思弁的な世界観を展開するようになった。

### (2) 日本の儒学の展開

上記中国の儒学の展開にみられた3つの分類が、江戸時代にはそれぞれどのように展開したのかを説明する。主題は荻生徂徠の思想についてであるので、最終的に徂徠の立場が明確になっていくような観点で展開する。

#### (1) 朱子学の立場

江戸時代に最初に展開した儒学は朱子学である。中国儒学の展開の中で、一番最後に開花したものが江戸時代には最初に展開した。徳川家康に厚遇された藤原惺窩が朱子学者であり、その惺窩の推挙によって弟子の林羅山が家康の侍講となった。このような人間関係から朱子学が幕府の官学となって隆盛をきわめた。さらに朱子学独自の理論が幕藩体制を支える理論として好都合でもあった。朱子学は天理を重んじる。自然の世界では天は尊く、地は卑しい。この理くつが人間社会の尊卑の序列となって置きかえられる。土農工商の身分秩序は天理に基づくものであると、きわめてドグマティックな説明ではある。

#### (2) 古学の立場

純粋に学術的な立場で儒学を研究する人々から朱子学に対する批判がお

こってきた。朱子学はそもそもの理論を築き上げるのに何を参考にしたのか。孔子や孟子の教えではないか。それならば、本当の儒学の教えを知るためには、朱子の学問ではなく直接に孔子や孟子の教えに帰らなくてはなるまい。これが古学の基本的な態度である。とくに伊藤仁斎は、孔子の教えこそ儒学の真精神であると考え、「論語」を宇宙第一の書と呼び、後世になってつくられた朱子の教えを斥けた。

### ㊦ 古文辞学の立場

朱子の立場から孔子の立場に帰るべきだとの方向をさらにすすめて行けば、孔子自身が手本として模範とあおいだ古代の堯や舜の時代にこそ、儒学の源泉はあるはずだとの考えが当然生じてくる。これが荻生徂徠の立場であった。徂徠の「答問書」に「わが道の元祖は堯舜にて候う」という言葉がある。徂徠にとっての元祖は、孔子や孟子ではない。もちろん朱子や王陽明でもない。元祖は最古の堯や舜であるのだ。そして、堯や舜の治績は「論語」や「孟子」にではなく「書」をはじめとする「六経」の中にある。儒学の本来の思想を知るためには、われわれも孔子自身が手本とした「六経」を学ばなければならない。そのためには、中国の最も古い時代の文字の意味が正確に理解できなければならない。語句の意味は時代時代によって変わってきてしまう。古代の文字を正確に読むことから始めなければならない。これが古文辞学の名称のおこりである。

こうして古文辞学の立場に到達した徂徠が「六経」の中から読みとった堯や舜の思想は何であったのか。安天下の思想であった。堯や舜は理想の君主である。「答問書」に「堯舜は人君にて候う」とある。堯や舜は、朱子のような学者でもなく、孔子のような教育者でもない。人君である。民衆の上に立ち、政治をおこなう君主であった。君主の役割は何か。民衆の衣食住を満足させ、生活の安定をはかることである。天下を安んずることである。儒学の教えは、天下を安んずることこそあるのだ。日常の道徳を説くのもなく、高遠な哲理をもてあそぶのもなく、ただ天下を安泰

にする政治目的の達成にこそ、その真の精神はあったのだ。

そして、この立場から、ひとり君主のみではなく、士農工商それぞれの立場もまた天下を安んずるための政治目的の一翼を担っているとの考えがすすめられてくる。農には食糧生産の役割が、工には器具生産の役割が、商には流通の役割が、そして士にはそれらの総括と取締りの役割がある。それぞれが、それぞれの職分を全うすることによって安天下の役割を担っている。士農工商それぞれが君主の安天下達成の手助けをなしている。

### 3. 江戸時代の儒学のまとめ

(1) 江戸時代の儒学には、朱子学から古学、古文辞学へと展開したように、儒学の源泉を求めて古代へとさかのぼろうとする態度があった。ここから、古典を正確に読もうとする学問態度や考証的態度を生み出したといえる。

(2) 朱子学と古文辞学(徂徠学)とではかなりの相違がみられるが、いづれにせよ、その思想的結論は士農工商の社会秩序を肯定化するための理論づけにおわっている。

(3) 徂徠にみられるように、儒学を個人の道徳的修養にではなく、広く社会全体の安定、政治的安泰という全体的な観点からみていこうとする政治的立場にすすめることができた。

## 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といます。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
  - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
  - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
  - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
  - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
  - (1) 会長 (1名)
  - (2) 副会長 (若干名)
  - (3) 常任幹事 (若干名)
  - (4) 幹事 (若干名)
  - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
  - (1) 役員を選任
  - (2) 決算の承認、予算の議決

(3) その他重要事項の審議

9. (年 度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経 費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまか  
ないです。  
会費は次の通りです。
- (1) 正 会 員      学校または研究団体を単位として年額  
1,500円
- (2) 賛助会費      年額    1口    2,000円
11. (細 則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則  
を作ることができます。
12. (規約の変更) この会の規約の変更は、総会の議決によります。

附 記

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめ  
られた。

# 事務局組織内規

昭54.6.8改正

全倫研 共通  
都倫研

1. 事務局は原則として会長校におく（都・全倫研とも規約改正の要あり）
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局長 原則として会長校に所属する。  
事務局顧問 歴代の事務局長があたる。  
事務局員 ア 事務局次長（1名）  
イ 研究部長（1名）、副部長（2名）  
ウ 研究調査委員会（全倫研のみ6名）  
エ 都倫研調査広報部長（1名）  
副部長（2名）、全倫研調査広報部長（1名）  
副部長（2名）  
カ 分科会世話人（都倫研のみ、分科会互選・分科  
会で2名）  
キ 大会役員（大会ごとに委嘱する）  
ク 事務局員若干名

### 3. 事務局分掌

事務局長 企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり  
会長を補佐する。  
事務局顧問 同上の目的で事務局長を補佐し助言する。  
事務局員 事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にする  
ため局長を補佐する。  
ア 事務局次長 事務局長を補佐する。  
イ 研究部 会の年間の研究方針をたて、研  
究活動全体を運営し紀要の刊行  
にあたる。分科会世話人は研究  
部に属し部長を補佐する。

ウ	調査研究部	調査活動の企画・実施・集計・分析等にあたる。
エ	広報係	会の記録、広報活動、会報、名簿の作成にあたる。
オ	会計	会の会計にあたる。ただし局長が代行することもできる。
カ	大会役員	事務局長、企画・運営の最高責任をもつ。
	庶務・連絡	局長を補佐する。
	受付・会計	文書配布物、名簿の作成、会計にあたる。
	司会	総合司会、研究発表表、研究討論、懇談会の司会。
	議長	総会議長
	記録	会の広報部を中心にして組織、文書記録、テープ、写真
	接待	来賓その他の接待

#### 4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする。

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

#### 5. 人 選

事務局の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることにする。ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

## 事務局より

都立清瀬高等学校 小川輝之

昭和54年度の活動は、この紀要の発行を持ちまして終りになります。都倫研は、過去十数年の間、一貫して研究発表・公開授業・講演を三本柱にして活動を続けてまいりました。先生方の日頃の研究成果のご発表や学者や専門家の貴重なお講演を通じて、私のような浅学の者は地道な研究の必要性を痛感させられ、また研究への情熱を触発されたものです。さらに先生方の授業を見せていただいて、自らの授業のいたらなさを知らされることになりました。いずれにしましても、都倫研活動の三本柱は、自らの授業を反省し、自らの授業を豊かなものにするよい機会になろうかと思われま

す。教員を長くやっていると、授業はマンネリ化し、新しい知識を吸収するのに億劫になるのですが、都倫研活動に参加しておれば、その点でよい刺激を受けることとなります。誠に他律的でよくないのですが、私のようなものには、都倫研の存在は大変大きなものです。こうした意味で、都倫研活動の伝統を築いていただいた諸先輩に感謝申し上げますと同時に、今年度研究発表や公開授業をお引き受けいただきました、井川哲夫先生（東高）、徳久寛先生（蒲田）、近藤卓先生（帝京）、勝田泰次先生（本所）、岡田典夫先生（ICU）、加瀬晴康、坂本清治先生（白鷗）、五味誠先生（保谷）、吉野明先生（鷗友学園）に心からお礼申し上げます。

ところで、会活動にとって最も大切なことは、多くの先生方に参加していただくことです。特に都倫研活動の中心は分科会活動にあります。近年その活動が少し停滞しています。おそらく繁忙な校務のなかで、なかなかご出席いただけないといったこともありま

しょうが、年4回の例会や月1回の分科会活動は地域的な配分を考えまして開催致しておりますので、昭和55年度は是非ご参加いただけますようお願い申し上げます。事務局は、できるだけ役立つ例会を企画し、先生方にご出席いただ

けやすい場所を工夫してまいりたいと考えております。

最後にりましたが、献身的に都倫研活動の運営にご協力いただきました事務局のみなさまに心から感謝致します。

## あ　と　が　き

昭和54年度の都倫研紀要は、会員の先生方の協力を得て出来上った。今年度は、例年に比較して、個人研究の論文が少なかった。従って今迄の都倫研紀要の中で一番薄いものとなったと思う。研究部を中心にして先生方には、執筆の依頼を行ったが、「現代社会」の取り扱いについての都倫研の出版原稿との重なりもあったために、少なくなったことと思う。

「倫理・社会」を週2時間生徒に教えていくことの出来る時間が次第に少なくなってきた。この残された日々、私達は、より一層の情熱と工夫をもって、授業を展開していきたいと思う。ある先生の授業展開の工夫を、そのままやってみたいと思ってみても、実際にはうまくいかないことの方が多い。生徒の姿勢や力量、全般的傾向と、教師の側の姿勢やしっかりした意図があってはじめて、そこに、工夫された授業がくりひろげられると思う。但し、最終的には教師自身の創造によるとしても、そこに至る過程において、いろいろの展開方法を知ることは私達にとっては必要であろう。そうした場として、私達の会での公開授業、研究発表、そして、この紀要を大いに活用したいと思う。そうすることがまた、「現代社会」の授業を豊かなものとしていくことになるのではないだろうか。

古い帝国ホテルが今日から解体されるというその日々、ホテルのドアマンが、ドアのノブを一生懸命にみがきあげているのを見て感激したという話を聞いたことがある。私達も、そうイキがることはないだろうが、地味で、しかも確実な一歩をこれからも歩みたいと思うし、又生徒にわずかであっても、授業の印象が残るようにしていきたいと思う。

最後になってしまいましたが、研究活動に協力して下さいました先生方に深く感謝致します。

(海野省治記)

昭和54年度 都倫研紀要18

発行 昭和55年3月25日 [非売品]  
著作者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会  
代表 増田 信

印刷 恂 稲谷印刷所  
東京都千代田区麴町3-1  
電話 (03) 234-7851~2

事務局 東京都清瀬市松山3-1-56  
東京都立清瀬高等学校内  
電話 (0424) 92-3500

発行者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会

